

浅川扇状地遺跡群

# 本村東沖遺跡II

市営住宅上松東団地2号棟建設事業  
にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

1995・3

長野市教育委員会

## 序

長野盆地は、東縁に上信越国立公園山系より延びる火山性の東部山地、西縁を海成等の隆起による堆積性の犀川丘陵山地に囲まれ南北に長く形成されています。そして盆地内部においても、千曲川より形成された沖積地とそれに注ぎ込む大小の河川による扇状地が発達しており、このような複雑多岐にわたる地形の上に私たちの長野市が成り立っています。そこにはそれぞれの地形や立地に応じて様々な生活や生産活動が見られ、古代から営々と続いてきた人々の英知の集合を見ることができます。

当遺跡は、飯綱山を水源とする浅川が盆地内に至り形成した広大な扇状地上に立地しております。ここは通称浅川扇状地遺跡群と呼ばれる長野市北部を代表する遺跡群で、遺跡は扇尖の西端付近に位置しています。ここに長野市の埋蔵文化財第67集として刊行いたします本書には、この度の発掘調査によって得られた成果が詳しく掲載されております。連続と綴られてきた人々の歴史の中のほんの一部にしかすぎませんが、地域史解明の一助としてお役にいただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました株式会社鹿熊組・高木建設株式会社の関係諸氏、発掘作業に携わっていただきました作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援ご指導いただきました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

長野市教育委員会

教育長 滝澤 忠男

## 例 言

- 1 本書は、市営住宅上松東団地2号棟建設事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は長野市長（担当建築課）の委託を受け、長野市教育委員会が担当し、長野市埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査地は長野市上松4丁目に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「浅川扇状地遺跡群」の範囲内にある。また調査地点を明確にするために調査地籍の字名「本村東沖」をとりこれを遺跡名として用いるが、本字内における発掘調査報告書が2冊目となることから混乱を避けるため、本報告書名は浅川扇状地遺跡群本村東沖遺跡IIとする。
- 4 遺構の測量は写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより1:20縮尺の基本原図を作成し、本書では基本的に1:80縮尺に統一して掲載しているが、遺構の種類または微細図などについてはこの限りではなくその都度縮尺を明示してある。また遺物に関しては土器実測図1:4、土器拓影1:3、金属器1:2の縮尺、石製品などについては原寸大でそれぞれ掲載している。なお土器における赤色塗彩についてはスクリーントーンにより表現している。
- 5 本書では、遺構についてそれぞれの名称をアルファベットに置き換え、住居=SB、円形周溝墓=SZ、土坑（木棺墓・土器棺墓を含む）=SK、溝=SDと略して記述している。
- 6 本書作成における作業は各調査員が分担し、執筆・編集は矢口・千野の指導の下、寺島が行った。
- 7 現場における調査ならびに、本書作成に際しては下記の方々からのご指導ご助言を頂戴している。芳名を銘記し感謝の意とかえさせていただきたい。  
青木一男 赤塩 仁 伊藤友久 上田典男 白居直之 川村浩司 黒岩 隆 小林正春 笹沢 浩  
渋谷恵美子 白沢勝彦 新谷和孝 土屋 積 鶴田典昭 直井雅尚 賛田 明 西山克己 原 明芳  
原田和彦 藤原直人 前島 卓 三上敬也 水沢教子 森泉かよ子 森嶋 稔 山口 明 山崎佐織  
山本 浩 横山かよ子（敬称略）
- 8 調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（担当 長野市埋蔵文化財センター）で保管している。

## 目 次

序	
例言	
I 調査経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の体制	2
II 浅川扇状地遺跡群の環境	3
III 調査概要	5
1 遺跡の概要	5
2 遺構と遺物	9
(1) 竪穴住居跡	9
(2) 墓跡	19
(3) 土坑・溝跡・その他	31
IV まとめ	35

## 挿表目次

表 1 遺構観察表	6
表 2 長野県内における弥生時代墓跡 出土金属製品一覧表	36
表 3 遺物観察表①	38
表 4 遺物観察表②	39
表 5 遺物観察表③	40
表 6 遺物観察表④	41

## 挿図目次

図 1 調査地点と周辺字図	1	図15 SB6	17	図30 SK3出土遺物	27
図 2 周辺の遺跡分布	3	図16 SB6出土土器	17	図31 SK4	28
図 3 事業用地内における 調査範囲	5	図17 SB7	18	図32 SK5	28
図 4 調査区全体図	7	図18 SB7出土土器	18	図33 SK6	29
図 5 SB1	9	図19 SZ1	19	図34 SK6出土土器	29
図 6 SB1出土土器	10	図20 SZ1出土土器	20	図35 SK7	30
図 7 SB2	10	図21 SZ1主体部微細図	20	図36 SK7出土土器	30
図 8 SB2出土土器	11	図22 主体部出土鉄鋼	21	図37 SK8	30
図 9 SB3	12	図23 SZ2	22	図38 SK1出土土器	31
図10 SB3出土土器	13	図24 SZ2出土土器	22	図39 SD1土層断面図	31
図11 SB4	14	図25 SZ2主体部微細図	23	図40 SD1出土土器	32
図12 SB4出土土器	15	図26 主体部出土鉄鋼・玉類	24	図41 SD2土層断面図	33
図13 SB5	16	図27 SZ3	24	図42 SD2出土土器	34
図14 SB5出土土器	16	図28 SK2	25	図43 遺構外出土遺物	34
		図29 SK3遺物出土状況微細図	26		

# I 調査経過

## 1 調査に至る経過

長野市は1998年長野冬季オリンピック開催にあわせて、その施設建設や会場・施設をつなぐアクセス道路、あるいは新規バイパスなどの建設が急ピッチで進められ、近年その開発は目覚ましい発展を見せている。高速交通網の整備も着々と進み、長野自動車道・上信越自動車道も平成5年3月に須坂長野東ICまで開通し、残りの区間についても順次建設が進行中である。また現在建設中の北陸新幹線もその長大な高架橋が市街地にも現れ始め、長野市の景観も徐々に変わりつつある。

長野市北部と隣接する牟礼村とをつなぐ主要地方道長野荒瀬原線、通称「牟礼バイパス」もこのほどは開通し、周辺は宅地造成や区画整理など開発ラッシュに加え、これら道路を中心とした新都市建設が本格化してくるのも時間の問題である。このような周辺の著しい開発状況の中、長野市は老朽化した市営住宅を改築する目的で現在の上松東団地を段階的に取り壊し、新たに高層市営住宅を建設する計画を打ち出した。

1号棟の建設は平成4年10月に実施され、工事立ち会いのもと調査を行ったが、この地点における埋蔵文化財の包蔵は確認できなかった。

平成6年9月、2号棟建設に先立ち長野市建築課との間で埋蔵文化財保護に関する協議を行った。

事業予定地内およびその周辺は周知の「浅川扇状地遺跡群」の範囲内に位置している。しかしながら、1号棟建設の際の調査成果により調査地周辺は埋蔵文化財の存在が希薄と考えられていた。2号棟建設工事に先立ち、長野市長（担当 建築課）の委託を受け平成6年10月に確認調査を実施したところ、地表下1m前後の深さに埋蔵文化財包含層を確認、さらに現地地形が南へ傾斜しているため北側の部分については造成による削平で既に包含層が露出している状態であった。これにより事業予定箇所に加えその周辺の予定地外箇所についても調査の対象となり、事業面積1400㎡に予定地外箇所の200㎡を加えた、計1600㎡についての調査を実施した。

発掘調査は平成6年10月24日より開始し、12月16日までの実習32日間である。

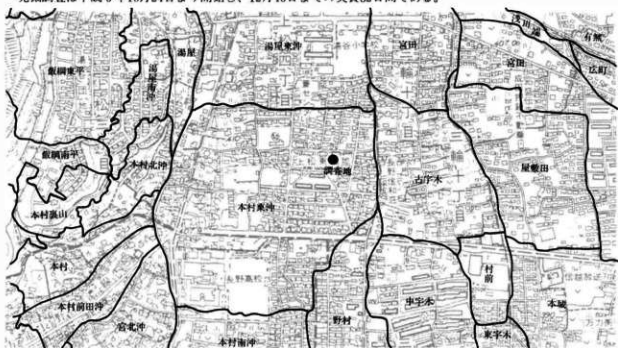


図1 調査地点と周辺字図 (1:10,000)

## 2 調査の体制

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	滝澤忠男
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	所長	荒井和雄
		連絡係	鈴木良男
		所長補佐	山中武徳
		所長補佐	矢口忠良
庶務係		庶務係長	山中武徳
		職員	青木厚子
調査係		調査係長	矢口忠良
		主査	青木和明
		主事	千野浩
		主事	飯島哲也
		主事	風間栄一
		主事	小林和子
		専門主事	太田重成
		専門主事	清水武
		専門員	中殿章子
		専門員	笠井敦子
		専門員	山田美弥子
		専門員	寺島孝典
		専門員	西沢真弓
		専門員	田村直也
		専門員	田中由美子



調査地遠景（中央の高い建物が1号棟）



重機による表土剥ぎ



湯谷小学校児童現場見学

調査員 青木善子・矢口栄子

調査参加者 金子ゆき・北原京子・北村幸恵・小林紀代美・小林さと・小林志げる・佐藤君江・佐藤幸子・佐藤はま・佐藤ひで子・鈴木友江・祖山和子・中澤秀子・中村恭子・成田敦子・新津三千子・西尾千枝・原汪子・宝珠れい子・宮沢けさよ・宮沢芳美・宮島静美・宮原孝子・向山純子・横山ふち江・吉沢トシ子・脇坂智子

整理参加者 池田見紀・岡沢治子・小泉ひろ美・塚田容子・徳成奈於子・西尾千枝・向山純子・武藤信子

測量委託 術写真測図研究所

調査を遂行していくうえにおいて、多くの方々より多大なるご支援ご助力をいただいている。重機の手配やプレハブ・トイレの設置など、様々な面でご協力を賜った株式会社鹿熊組・高木建設株式会社の関係諸氏、また調査に参加していただいた発掘作業員の皆様には感謝申し上げる次第である。さらに、出土した金属製品の保存処理については、長野県埋蔵文化財センター調査研究員、白沢勝彦氏・山本 浩氏にご指導いただいたのをはじめとして、出土遺物に関して多くの方々からご助言を賜った。重ねて厚くお礼申し上げます。

## II 浅川扇状地遺跡群の環境

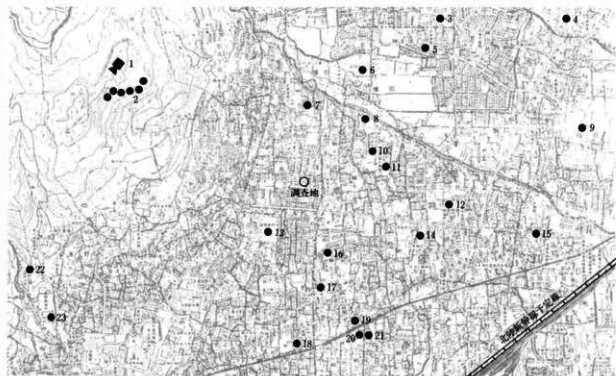
飯綱山を水源とする浅川は山間部を浸食しながら流下し、盆地に流入した浅川はそのまま南東方向に流れ千曲川と合流する。浅川東条地籍に所在する通称浅川原口とよばれる谷口から広大な扇状地形が形成され、長野市でも有数の扇状地となっている。この扇状地上には数多くの遺跡が点在し、東側一帯に隣接する小島柳原遺跡群とともに浅川扇状地遺跡群は長野市北部を代表する遺跡群である。

この浅川扇状地遺跡群は、市街地あるいはそれに近いこともあり古くから道路建設や宅地造成・区画整理などの開発が頻繁に行われてきたところで、遺跡の発掘調査件数も枚挙にいとまがないほど膨大なものとなっている。また最近では北陸新幹線建設工事にもなう発掘調査も副長野県埋蔵文化財センターによって進められている。

ここでは長野市教育委員会が実施した発掘調査を中心に、浅川扇状地遺跡群内での代表的な遺跡を概観し、浅川扇状地遺跡群の環境としたい。

### 本村東沖遺跡（長野高校地点）

長野高等学校校舎改築工事にもなう平成3年度に発掘調査が実施された。調査面積は約5000㎡を測り、遺構検出件数も多い。調査では弥生時代中期後半から平安時代にかけての住居跡104軒が検出され、特に弥生時代後期住居跡などからは箱清水式土器に加え北陸系土器が多数出土している。また古墳時代の31号住居跡からは子持勾玉、36号住居跡から125枚纏まって出土した石製模造品の未成品、5号住居跡・47号住居跡からそれぞれ1点ずつ出土した土鈴など祭祀的意味合いの強い遺物に加え古式須恵器の出土も多く、これら古墳時代中期集落と遺跡



1. 地蔵山前方後方墳 2. 上池ノ平1～6号墳 3. 北部中学校遺跡 4. 牟礼バイパス遺跡 5. 神楽橋遺跡
6. 増田遺跡 7. 湯谷古墳群 8. 浅川端遺跡 9. ニツ宮・本郷・柳田・稲添遺跡 10. 押鎌遺跡
11. 徳信寺居館址 12. 長野吉田高校グラウンド遺跡 13. 本村東沖遺跡 14. 押鎌城址 15. 吉田町東遺跡
16. 宇木遺跡 17. 相ノ本城址 18～21三輪遺跡 22. 小丸山古墳 23. 箱清水遺跡

図2 周辺の遺跡分布 (1:25,000)

の北西にそびえる地附山山頂に立地する地附山前方後方墳、またその直下に展開する上池ノ平1～6号墳との関連性も想定できよう。なお遺構はともなわなかったが縄文時代早期末から中期後半の土器片も出土している。

文献：長野市教育委員会1988『地附山古墳群』長野市の埋蔵文化財第30集

長野市教育委員会1993『浅川扇状地遺跡群本村東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第50集

#### 長野吉田高校グランド遺跡

昭和45年度、長野吉田高等学校プール建設にともない調査されたのを契機に、同50年度には長野市都市計画北部都市下水路事業にともなう1次調査、翌51年度には2次調査が実施された。そして昭和60年度長野吉田高等学校体育館および格技室新築にともなう調査が行われ、弥生時代後期前半の住居跡10軒を検出した。なおこの遺跡は弥生後期前半の「吉田式土器」が形式設定（笹沢 1970）された標識遺跡である。

文献：長野市教育委員会1987『長野吉田高校グランド遺跡』長野市の埋蔵文化財第22集ほか

#### 三輪遺跡

まず昭和50年度に三輪小学校の校舎改築工事にともなう発掘調査が3次にわたって実施され、その後昭和60年度に本郷住宅地造成、平成2年度に本郷団地宅地造成、平成4年度には長野県職員宿舍建設事業、平成5年度にはマンション建設事業にともなう調査が順次実施されており、現在までに5地点の調査が行われている。いずれも弥生時代後期から平安時代あるいは中世といった各時代の遺構が多数検出されている。

文献：長野市教育委員会1980『三輪遺跡』長野市の埋蔵文化財第6集

長野市教育委員会1987『三輪遺跡2』長野市の埋蔵文化財第20集

長野市教育委員会1991『栗田城跡 下宇木遺跡 三輪遺跡3』長野市の埋蔵文化財第38集

長野市教育委員会1993『浅川扇状地遺跡群三輪遺跡4』長野市の埋蔵文化財第49集

長野市教育委員会1994『浅川扇状地遺跡群三輪遺跡5』小島柳原遺跡群上中島遺跡』長野市の埋蔵文化財第62集

#### 牟礼バイパスA～E地点遺跡

主要地方道長野荒瀬原線建設事業にともない昭和56年度にA・E地点、同59・60年度にB・C・D地点の調査を実施した。縄文時代から中世に至るまでの複合遺跡で、特にD地点の調査では弥生時代中期後半の集落を検出し、出土した土器は断片的な資料ではあるものの栗林式土器の古い段階に位置付けられ、以来弥生時代中期研究には欠かせない重要資料となっている。また平安時代住居跡からは古代瓦が多量に出土し、当時「善光寺瓦」出土と注目されたが、善光寺瓦そのもののありかたが最近の研究により問題視されるようになり、従来停滞しつつあった古代寺院研究が進展の兆しを見せている。今後の研究動向に注目したい。

文献：長野市教育委員会1982『浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスA・E地点』長野市の埋蔵文化財第12集

長野市教育委員会1986『浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスB・C・D地点』長野市の埋蔵文化財第17集

原田和彦1994『千曲川流域における古代寺院』長野市立博物館紀要第2号

#### 二ツ宮遺跡・本塚遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡

長野市稲田徳間土地区画整理事業および、準用河川新田川改修事業にともなう発掘調査で、昭和63年・平成元年・平成2年の3次にわたって行われている。弥生時代中期以降の複合遺跡で、土地区画整理地点では133軒、新田川地点では8軒の計141軒の住居跡が検出され、ほか多数の遺構を検出している。平安時代のもと思われる瓦塔が溝（10号溝）とその周辺から出土しており、古代史究明の一級資料として今後の研究動向が期待される。

文献：長野市教育委員会1992『浅川扇状地遺跡群二ツ宮遺跡・本塚遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』長野市の埋蔵文化財第47集—2分冊—



### III 調査概要

#### 1 遺跡の概要

発掘調査した約1600㎡の範囲には各時代様々な遺構が検出され遺物が出土した。これら遺構や遺物の詳細に関しては後節で説明することとして、ここでは遺跡の大まかな概略説明をしておきたい。

今回調査した地点は浅川扇状地遺跡群の扇尖部西端付近に位置するものであるが、周辺は早くから住宅地として利用され続けてきたところで、埋蔵文化財の包蔵地として判断される地域ではあるものの、これまでに発掘調査は実施されておらず、どういった性格の遺跡であるかについては不明であったが、今回の事業に先立ち確認調査を行ったところ弥生時代後期の遺跡の存在が確認され、長野高校の校舎改築の際に調査された弥生時代後期集落あるいは、それに関連する遺跡であると認識した。

調査では当初の予想を遙かに上回る遺構・遺物を検出した。当地はまず縄文時代晩期に初めて人々が生活をし始めるものと思われるが、該期の遺構としてはっきり認識できるものは遺物の出土した土坑が1基検出されただけであり、現段階では周辺に居住域が展開している可能性があるという指摘だけににとどめておく。その後再び人々の痕跡をみるには長い時間を経た弥生時代後期まで待たなければならない。弥生時代後期は集落遺跡ではなく墓のみで構成される「墓域」であった。浅川扇状地遺跡群でこれだけまとまった弥生時代の墓跡が確認されたのは初めてであり、墓域の周囲を巡っているものと判断される溝跡も含め今後の研究に重要な位置を占めてくるであろう。古墳時代前期になると、当地は前時代までの「墓域」としての機能を失い集落域が展開する。浅川扇状地遺跡群では該期の集落遺跡は従来希有であり、長野高校地点で確認された中期あるいは後期集落の調査成果とともに、古墳時代の様相が徐々に明確になってきたといえる。

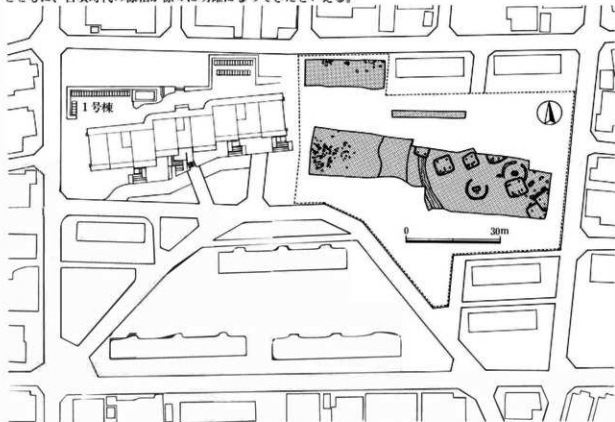


図3 事業用地内における調査範囲 (1:1,200)

表1 遺構観察表

遺構名	時代	主軸方向	規模(m)	内部施設等	出土遺物等	備考
SB1	古墳・前	N-35°-W	5.40×5.60	炉・柱穴・壁溝・貯蔵穴	土器	SB7と重複
SB2	古墳・前	N-15°-W	5.50×6.00	炉・柱穴・壁溝・間仕切溝・貯蔵穴	土器・貯蔵穴内より曜	
SB3	古墳・前	N-22°-W	4.50×4.30	炉・柱穴・壁溝・間仕切溝・ベット状遺構・貯蔵穴	土器	
SB4	古墳・前	N-17°-W	5.50×5.60	柱穴・壁柱穴・壁溝・間仕切溝・貯蔵穴	土器	
SB5	古墳・前	N-13°-W	—×6.30	柱穴・壁溝・間仕切溝・貯蔵穴	土器	
SB6	古墳・前	N-18°-E	—×4.60	柱穴・壁溝	土器	
SB7	古墳・前	N-26°-W	—×6.20	炉・柱穴・壁溝・間仕切溝	土器	SB1と重複
SZ1	弥生・後	E	径7.70	周溝・主体部	土器・鉄鋼・歯	円形周溝墓
SZ2	弥生・後	N-83°-E	径6.50	周溝・主体部・小口穴	土器・鉄鋼・管玉・ガラス玉	円形周溝墓
SZ3	弥生・後			周溝		円形周溝墓
SK1	縄文・晩		径0.95		土器	
SK2	弥生・後	N-82°-E	1.35×0.95	小口穴	歯	木棺墓
SK3	弥生・後	N-48°-E	2.10×1.05		銅鋼・鉄鋼・管玉・ガラス玉	木棺墓
SK4	弥生・後	N-58°-E	1.30×—	小口穴		木棺墓
SK5	弥生・後	N-55°-E	1.30×0.65	小口穴		木棺墓
SK6	弥生・後	E	径0.55		土器	土器棺墓
SK7	弥生・後	N-74°-E	1.20×0.75		土器	木棺墓?
SK8	弥生・後	N-55°-E	1.60×—	小口穴		木棺墓
SD1	弥生後・古墳前		幅2.3・深1.4		土器	V字溝
SD2	弥生後・古墳前		幅0.0・深1.0		土器	自然流路?



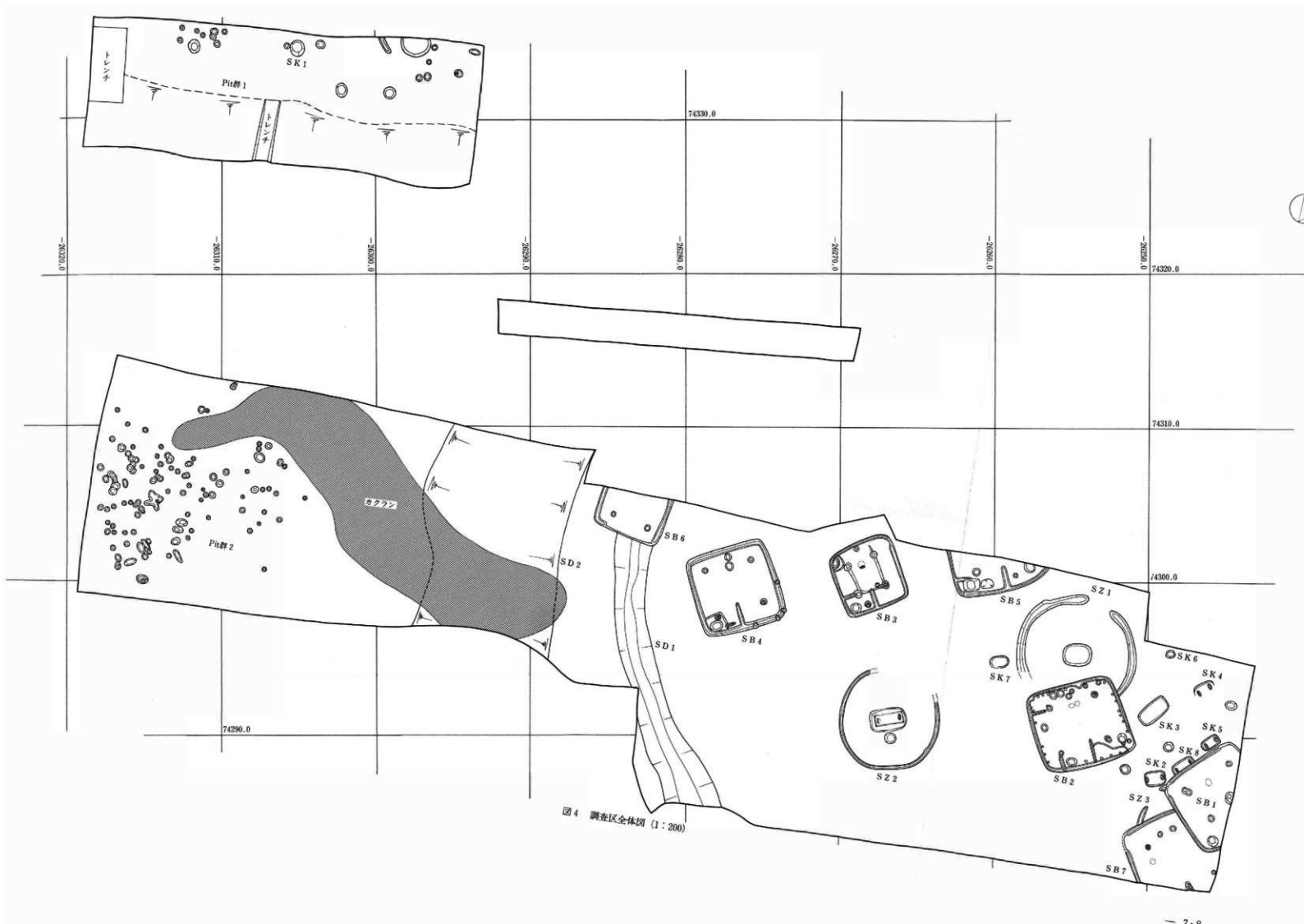


图4 调查区全体图 (1:200)

## 2 遺構と遺物

### (1) 竪穴住居跡

#### SB 1

調査区の東端で検出された住居跡で、SB 7・SZ 3・SK 8と重複関係にあり、中では最も新しい遺構である。図程は調査区外により検出できなかったが、5.40m×5.60mを測る方形住居で、北壁と西壁から南壁にかけて深さ10cm程の壁溝が巡る。主柱穴は範囲内において3基(Pit 1～Pit 3)確認されている。1基は調査区域外に存在しているものと思われ、おそらく横長の長方形配列になるものであろう。今はPit 1とPit 2の中間に位置しており、やや窪みのある地床跡となる。また住居南西隅には貯蔵穴(Pit 4)が検出されている。内部から壺〔図6-1〕が逆位の状態で出土し、壺の中には土が半分程流入していた。貯蔵穴は今回調査された住居跡において普遍的に存在しており、住居隅に築かれる。平面形は直径60cm前後の円形を呈し、深さはそれぞれまちまちであるが70～90cmを測る深いものである。

床面は比較的明瞭に検出できるものの、全体に軟弱でしまりはない。

出土土器は比較的少なく床面より若干濡いた状態で出土している。また小破片が多く完形となるものは少ない。器種には壺(1・7)、甕(2・4)、高杯(5)、鉢(6・8・9)、甌(10)などがある。貯蔵穴から出土した1は全体がハケ調整によって仕上げられる。7は赤彩される甕で頸部に10本の櫛状工具により横方向に3条、縦方向に2条によって構成されるT字文を施文し、縦方向の区画は4箇所に施される。3・4は口縁端部に面取りを施す。6・9は鉢と思われるが、下部が欠損しているため高杯あるいは器台となる可能性もあるだろう。10は底部に焼成前穿孔を持つ甌で外面はハケ、内面はヘラケズリによる調整が施される。

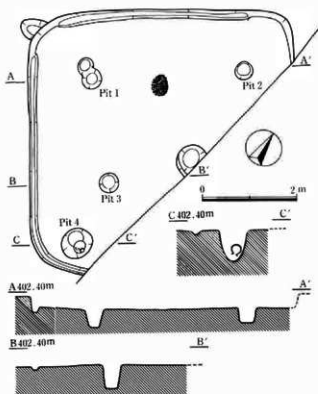


図5 SB 1 (1:80)



SB 1



貯蔵穴内土器出土状況

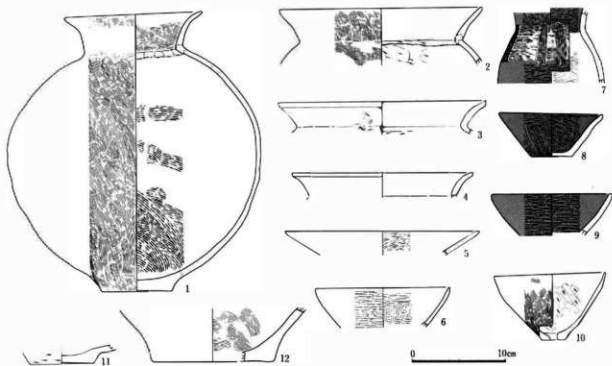


図6 S B 1出土土器 (1:4)

#### S B 2

S Z 1 と重複関係にある。5.50m×6.00mを測る方形住居で南東隅に断絶部があるものの深さ7cm程の壁溝が巡り、その周りに直径10cm前後、深さは3～5cm程の小ピット21基が検出されている。主柱穴は4基 (Pit 1～Pit 4) 方形配列となり、Pit 4の上面には甕 (3) が横になった状態で、底には小型丸底 (6) が逆さの状態出土している。炉は奥主柱穴間やや中央部より位置する地床炉で2基並んで検出された。また3本の間仕切溝も検出されており、南側の間仕切溝の間には貯蔵穴 (Pit 5) が掘り込まれ、その内部より多量の礫が出土した。床面は中央付近でやや堅くなっているものの周辺は比較的軟弱でしまりはあまりない。南側には高まりを持つ部分、いわゆるベッド状遺構の様になるが検出は明瞭ではない。

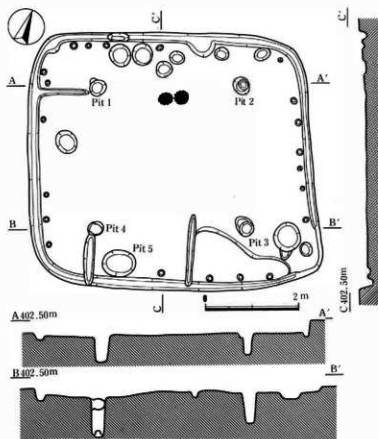
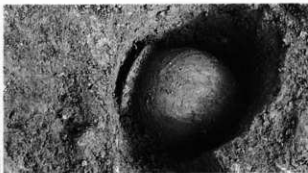


図7 S B 2 (1:80)

出土土器 [図8] には壺 (1・2)、甕 (3・4)、小型丸底 (6)、杯 (7)、高杯 (8～12) がある。12は杯部が欠損しているため判然としないが器台となる可能性もあろう。



SB 2



柱穴内土器出土状況



SB 2 掘り下げ作業風景

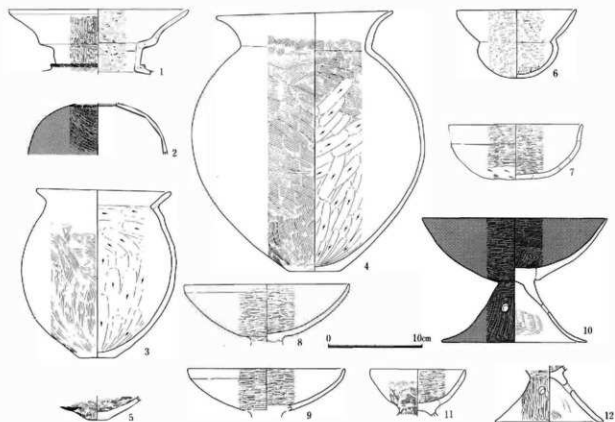


图8 SB 2出土土器 (1:4)

### SB 3

4.50m×4.30mを測る方形住居で、壁溝は深さ10cm程度ではほぼ全周する。主柱穴は4基（Pit 1～Pit 4）方形配列となり、その断面はPit 3を除き漏斗状を呈する。間仕切溝も3本検出されている。1本は西壁からPit 4へ伸び、もう1本は南壁から住居中央方向へ伸びるもの、もう1本はPit 3から西側へ突出したものである。炉は奥のPit 1とPit 2の間に位置しており、その南側には楕円形の穴が検出され、「方緑石」の抜き取り痕であると思われる。床面は全体に堅くしまっており北側を除く壁際は若干の高まりを持つベッド状遺構となる。またPit 5は貯蔵穴、その脇には出入口施設と判断されるPit 6も検出されている。

断面図B-B'に示した土層は住居埋没過程の堆積状況であるが、上層は褐色の粘土質土層で土器の出土はあまりない。土器は下層の暗褐色粘土質土層から出土しており、ほとんどが小破片である。

出土土器 [図10] には壺（1～3）、甕（4～10）、台付甕（16）、器台（12～15）、鉢（11・17）がある。3は有段口縁の壺、8～10は口縁端部に面取りがされている。10は端部に1条の凹線文をもつ。

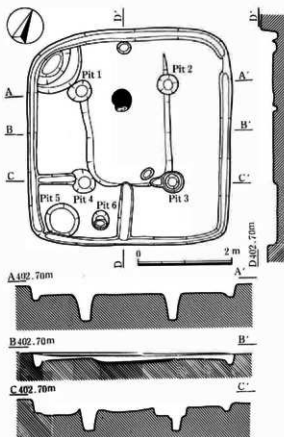


図9 SB 3 (1:80)



SB 3

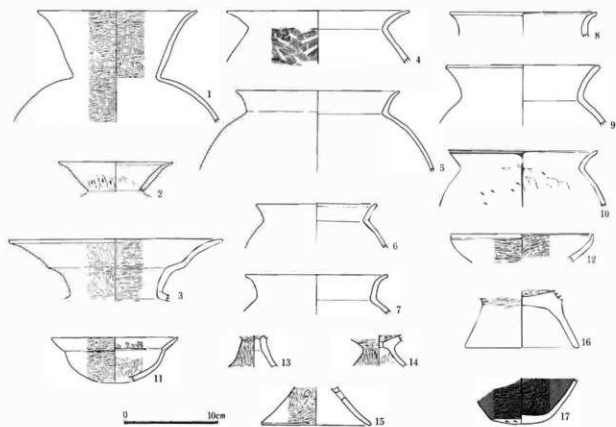


图10 SB3出土土器(1:4)



SB3 遺物出土状況



#### SB 4

5.60m×5.60mを測る方形住居で、SB 3 同様他遺構との重複はない。壁溝は全周し深さは13cm前後と比較的深い。主柱穴は4基 (Pit 1～Pit 4) で方形を呈する。南側中央には間仕切溝が検出されているが、範囲内においてかは確認できなかった。床面は明確に検出できるものの全体に軟弱である。また東壁から南壁にかけて4基の壁柱穴 (Pit 6～Pit 9) が認められ、南西隅には貯蔵穴 (Pit 5) が確認されている。

断面図A-A'に示した住居埋没過程の土層の堆積状況ではSB 3に示したものと若干その内容を異にしている。上層は黄褐色砂質土層で遺物は全く確認できない。中層は褐色粘土質土層、下層は暗褐色の粘土質土層でいずれも土器を多く含んでいる。これにみられる土層観察の差異については、の

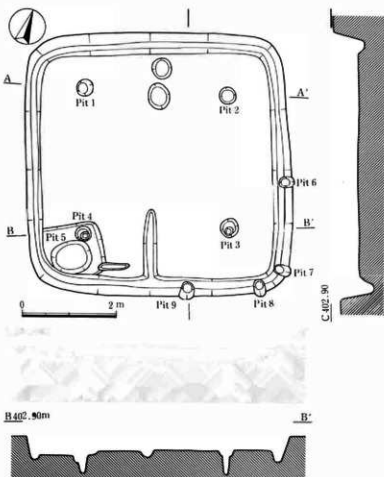


図11 SB 4 (1:80)



SB 4

ちのIV章まとめの中で触れる。

土器は多量の礫とともに多く出土している。出土土器 [図12] には壺 (1・2・17~19)、甕 (2~15)、小型丸底 (24・25)、鉢 (16・20)、器台 (21~23)、ミニチュア土器 (26) がある。1は有段口縁壺で円形のボタン状の突起が3つずつ4箇所に貼付される。6~13は口縁端部に面取りがされ10・12・13は疑問線文が施されている。

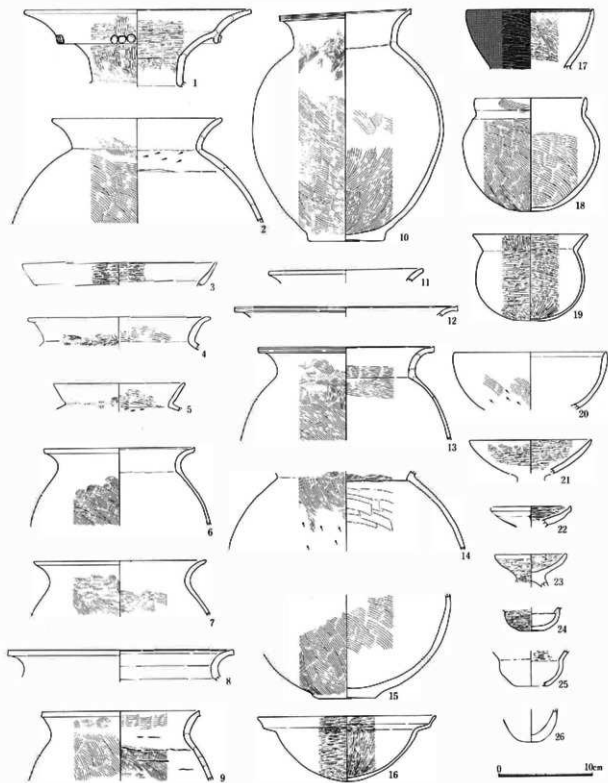


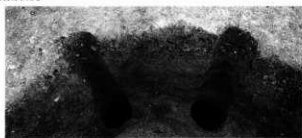
図12 SB4出土土器 (1:4)



壁柱穴検出状況



近影



完景

SB 5

北側は調査区外により検出できず、範囲内においては尙程しか検出していないため全体の規模や住居平面形などについては判然としないもの、東西方向6.30mを測り、平面形は方形を呈するものと想定される。範囲内において壁溝は切れ目なく通り、主柱穴は1基 (Pit 1)、竈は範囲内では確認されなかった。間仕切溝も西側と南側にそれぞれ1本ずつあり、区画された中には貯蔵穴 (Pit 2) が検出されている。またその脇には深さ5cm程の窪み (Pit 3) が確認されているが、出入口施設を想定する。床面は比較的明瞭に確認できたものの全体に軟弱である。

出土土器 [図14] には壺 (1)、台付甕 (2・3)、小型丸底 (4)、器台 (5) がある。

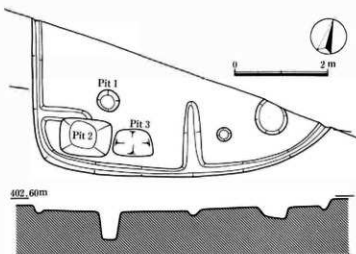


図13 SB 5 (1:80)



SB 5



図14 SB 5出土土器 (1:4)

SB 6

SD 1と重複関係にあり、北側外程が調査区外により検出できなかったが、東西方向4.60mを測る方形住居を想定する。南側を除く壁際に壁溝が検出され、範囲内において柱穴は2基（Pit 1・Pit 2）確認されたが、今は検出されていない。床面には炭化物が多く検出されているが、いわゆる焼失住居とは区別しておく。床は比較的明瞭に確認できたが、SD 1の埋没後に住居が構築されており、SD 1上層の黄褐色砂質土層が非常に軟弱であったためその部分だけ床面が沈下してしまい、床面に20cm程の段差が生じている。またこの住居のみ貯蔵穴は存在せず、周仕切溝らしき掘り込みも確認されていない。主軸方向も他の6住居とは違う方向に傾いており、自然流路と想定されるSD 2を含めた地形条件に左右されたものと思われる。

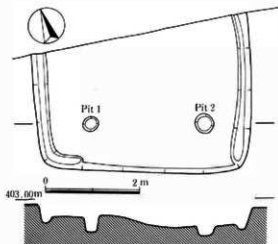


図15 SB 6 (1:80)

出土土器 [図16] には壺 (1)、甕 (2~5)、高杯 (6) がある。すべて床面上からまともに出土したもので、1・3・6は完形に近い。特に3はつぶれた状態で住居中央付近より出土し、1と6は重なって出土した。住居廃絶の際の廃棄が想定できよう。



SB 6



炭化物出土状況

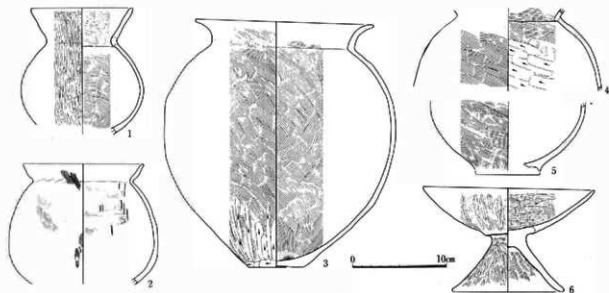


図16 SB 6出土土器 (1:4)

SB 7

SB 1と重複関係にある。西側はSB 1の破壊を受け、南東側は調査区外により検出できなかったが、東西方向6.20mを測る方形住居を想定する。壁溝は北壁と西壁に深さ5cm程の掘り込みが存在しているだけで全周はしない。主柱穴は3基 (Pit 1～Pit 3) 検出され、方形配列になるものである。間仕切溝も南側に1本検出されている。炉はPit 1の南に検出され地床がとなるものであるが、他に検出される炉の位置とはやや異なる。床面は全体に軟弱ではあるものの比較的明瞭に確認できた。また範囲内において貯蔵穴は検出できなかったが、他の住居跡の様相から南西隅にあるものと想定する。

土器の出土量は検出面から床面までが浅かったこともあり多くはないが、炉の周辺にまとまって出土している。

出土土器 [図18] には壺 (1・2)、甕 (3～8)、鉢 (9) がある。みな小破片であり全体の様子を把握できるものはないが、8個体を図化できた。壺は赤彩されるもので文様はみられない。4と5は同一個体と思われるが胴部破片は見当たらない。外面は全体にヘラケズリによるものである。6・7は口縁端部に面取りされるもので7は疑問線文を施す。8は体部に8本の描描波状文を施文する。

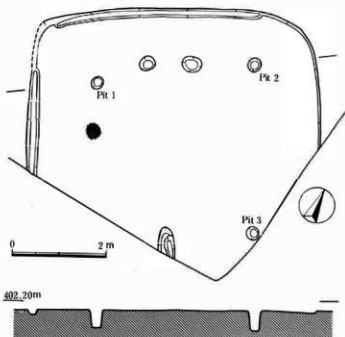


図17 SB 7 (1: 80)



SB 7

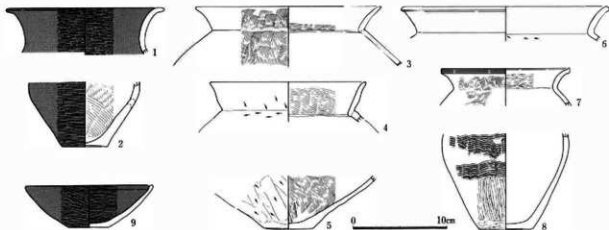


図18 SB 7出土土器 (1: 4)

(2) 墓跡

S Z 1

S B 2 と重複関係にあり、南から西にかけて破壊を受けているため全体を確認することはできなかったが、径7.70mを測る円形周溝墓である。溝は全体に浅く西側で20cm～30cm、東側で8cmを測るもので、西側断面は2層に分層され、上層は暗褐色の粘土質土層、下層は黒褐色の粘土質土層で、いずれも礫を多量に混入している。周溝は北東側に陸橋部が認められ、おそらくこの一箇所のみで設けられるものであろう。

周溝範囲内の中央部分には180cm×130cmの隅丸長方形を呈する主体部が検出され、深さは45cmを測る。

主体部から出土した土器は、すべて覆土上層から中層にかけて出土している。主体部の調査状況から木棺を用いた埋葬であると判断され、その出土状況から木棺の蓋の上に供えられた土器と考えたい。

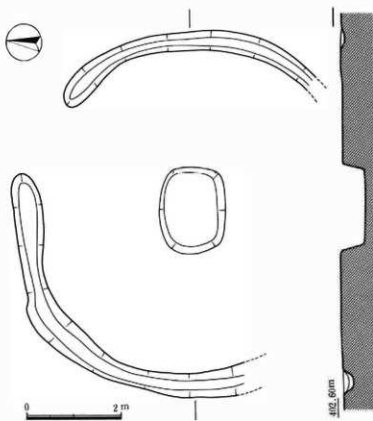


図19 S Z 1 (1:80)



検出状況



発掘



主体部遺物出土状況



周溝内遺物出土状況

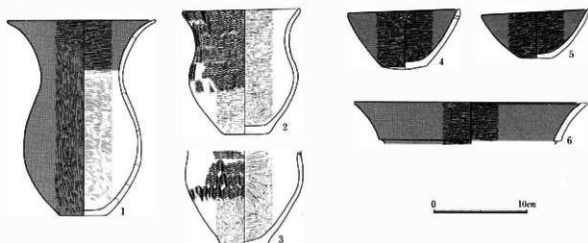


図20 SZ1出土土器 (1:4)

出土土器〔図20〕には壺(1)、甕(2・3)、鉢(4・5・6)がある。この中で3のみ周溝内から出土したもので、その他はすべて主体部からの出土である。

1は赤彩される甕で内面の赤彩は頸部まで及び、胴部はハケによる調整で仕上げられる。2は9本単位の櫛描簾状文を頸部に施文したのち、頸部から口縁端部と頸部から胴部へという順に波状文を施文している。3は6本単位の櫛描簾状文を頸部に施し、胴部には波状文が施文される。4・5は全面に赤彩される鉢で、4は口縁部に2ヶの小孔が一箇所に穿たれる。なお5は外面底部にまで赤彩が施される。6は口縁端部に面取りされ有段口縁となるが、高杯となる可能性もあろう。

主体部は先述したとおり木棺を用いて埋葬されるものである。墓壇内部には多くの礫が確認されており、その出土状況から木棺に使用される板材を墓壇内において組み立てる際にその安定を図るため用いられた礫であると判断される。礫の散布状況から木棺の大きさは長辺130cm短辺50cmを測る長方形を呈するものである。木棺墓内底面のやや浮いたところからは鉄釘と歯が出土している。歯は奥歯が4本並んだ状態で出土した。鉄釘は潰れた状態で出土し、破片の中に繊維質の付着が認められることから、おそらく布にくるまれて副葬品として棺内に納められたものと判断する。頭位は歯の出土位置により東に向くものと思われる。

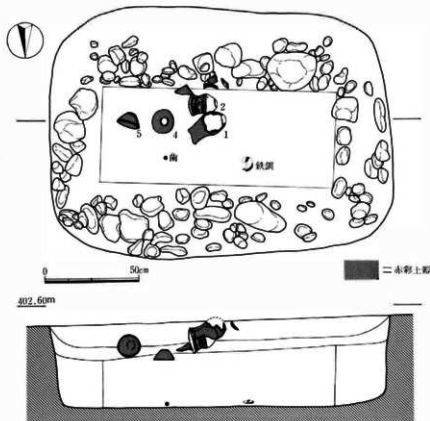


図21 SZ1主体部微細図 (1:20)



主体部検出状況



主体部完掘

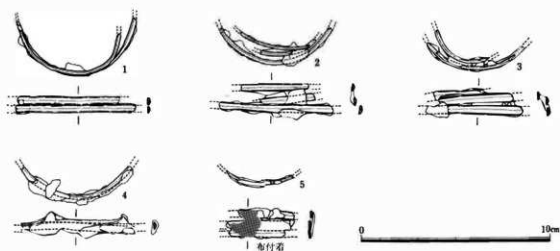
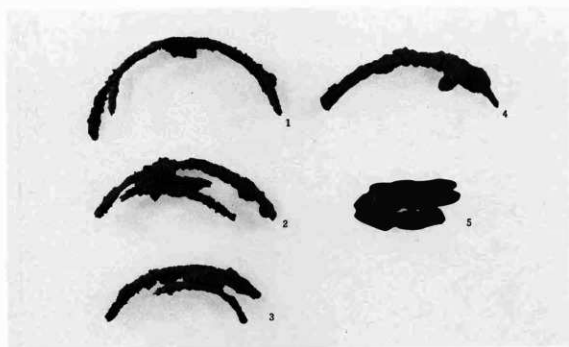


図22 主体部出土鉄鋼 (1:2)



SZ 1 出土鉄鋼



S Z 2

調査区の中央付近に検出され他遺構との重複はみられないものの、溝の北側一部分は確認できなかった。その他には陸橋部は認められなかったため、S Z 1における調査結果から北側に陸橋部を持つと思われる径6.50mの円形周溝墓である。溝は全体に細く浅いもので、遺物の出土もみられない。主体部は周溝範囲内の中央部に位置し墓壙は235cm×150cmの隅丸長方形を呈するもので、その底面には長辺170cm短辺75cmの長方形の落ち込み、さらにその底面から長辺方向に楕円形の小口穴が検出され、その位置から小口板を埋め込む木棺を用いたと判断される。

出土土器 [図24] は壺1点のみで、赤彩された口縁部破片である。また内部からは鉄鋼などの金属製品と管玉1点・ガラス玉4点が出土している [図26]。鉄鋼はバラバラになって出土している。管玉の石材は緑色凝灰岩製である。



図24 S Z 2 出土土器 (1:4)

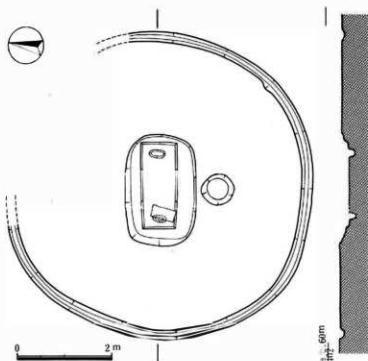
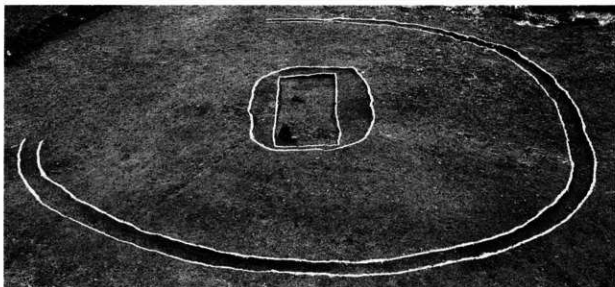


図23 S Z 2 (1:80)



主体部鉄鋼出土状況



S Z 2



主体部完塚

- 1 : 褐色粘質土
- 2 : 暗褐色粘質土
- 3 : 黒褐色粘質土 炭化物多く含む
- 4 : 暗褐色粘質土 2層に比べ暗い

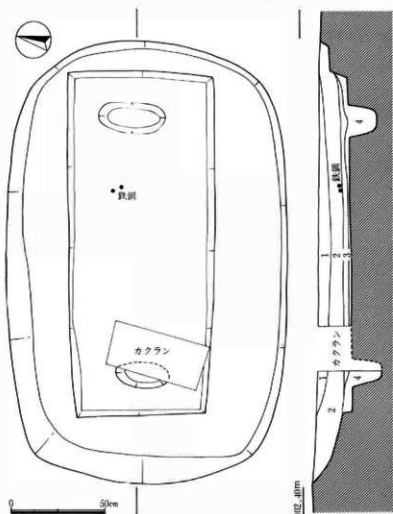


図25 SZ2主体部微細図 (1:20)



主体部検出状況①



主体部検出状況②

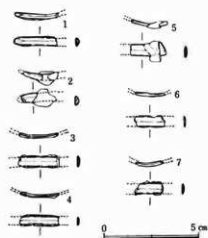
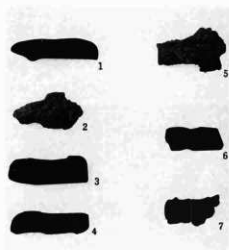
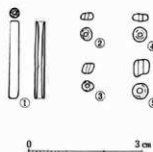


図26 主体部出土鉄鋼 (1:2)・玉類 (1:1)



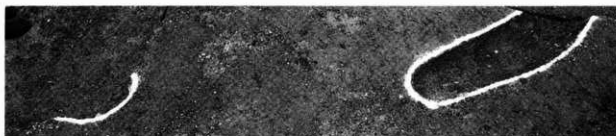
SZ 2 出土鉄鋼

### SZ 3

SB 1・SB 7と重複関係にある。この両住居跡により大半が破壊されているため、周溝の北側の陸橋部が検出されたにすぎず、よって周溝のほとんどと主体部は確認できなかった。出土遺物もなく判断に苦しむが、遺存する形態から円形周溝墓であると考える。



図27 SZ 3 (1:80)



SZ 3



SZ 1 (奥)とSZ 2 (手前)の配置

### SK 2

長辺135cm、短辺95cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。土器などの出土物はないものの、底面よりやや浮いた位置から歯が出土している。長辺壁際の底面には楕円形の小口穴が対に検出され、歯の出土と遺構の検出状況から東に頭を向けて埋葬されたもので、長辺100cm、短辺50cm程の棺を用いた木棺墓である。弥生時代後期に比定されるであろう。



小口穴検出状況

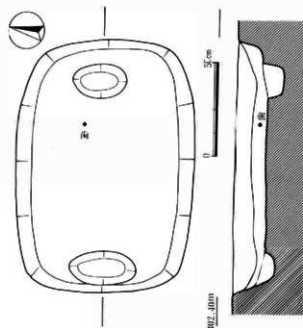


図28 SK 2 (1:20)



立ち割り断面

### SK 3

SB 2の東側に検出され、長辺210cm、短辺105cmの隅丸長方形を呈する。底面には中央部分に不整長方形の窪みが確認され、そこに遺物が集中する。この部分に長辺135cm、短辺55cm程の木棺が用いられたものと判断したい。

出土遺物 [図30] には銅鐏、鉄鍬、管玉、ガラス玉がある。銅鐏は5つ連なった状態で出土し、その中には手首と思われる骨が残っていた。ちなみにその他の部分での骨の確認はされていない。鉄鍬は無蓋で底面よりやや浮いた位置より出土している。管玉は散乱して出土しているため、埋葬時に着装していたものとは考えにくく、その散乱状態から遺体の上に撒き散らしたような状況が想定できよう。調査時において24点、内部の土を水洗いした際に11点が出土し、合計35点出土した。石材は緑色凝灰岩製が19点、鉄石英製が7点あり、もう1点は鹿角製と思われる。ガラス玉はすべて水洗いの際に出土したもので10点あり、色はすべてスカイブルーである。



SK 3完堀

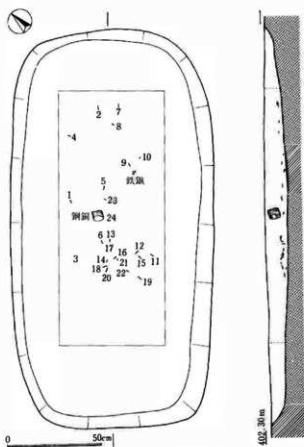


图29 SK 3 遗物出土状况微缩图 (1:20)



遗物出土状况



遗物出土状况近影



銅圓出土状況



鉄錐出土状況

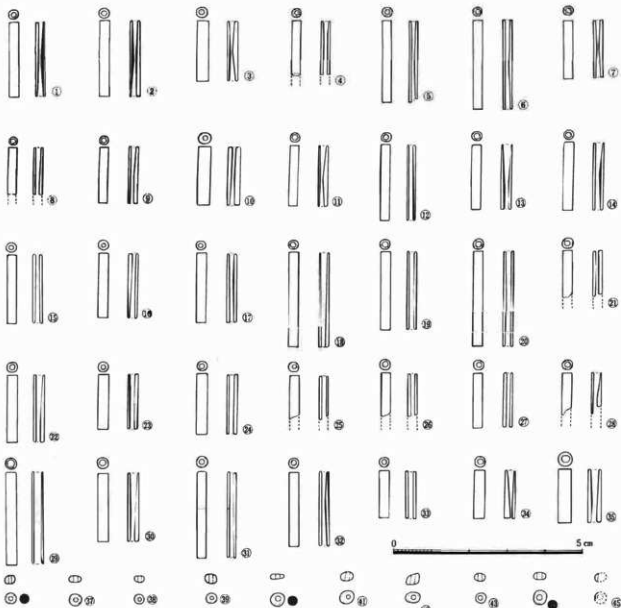


図30 SK 3 出土遺物 (1~6 1:2・①~⑳ 1:1)

#### SK 4

南側は検出できず、北側に掘り込みの一部を確認できたにすぎなかったものの、長辺方向の底面には2つの楕円形を呈する小口穴が検出された。長辺130cmを測る木棺墓である。木棺は小口穴の位置などにより長辺80cm、短辺45cm程の範囲内にあるものと考えられ、比較的小さいものである。

検出面から非常に浅かったため出土遺物はないが、弥生時代後期に比定されるであろう。

#### SK 5

SB 1の北に検出され、他遺構との重複はない。長辺130cm、短辺65cmを測る木棺墓である。長辺の底面には小口穴が2つ確認され、木棺の大きさは小口穴の位置により、長辺75cm、短辺40cm程の範囲内にあるものでSK 4同様に小さいものである。

検出面からは10cmの深さを測るが遺物の出土はなく時期比定は難しいが、弥生時代後期の木棺墓と判断したい。

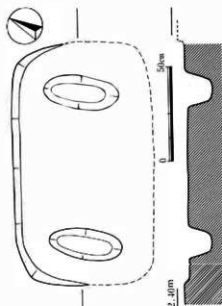


図31 SK 4 (1:20)



SK 5

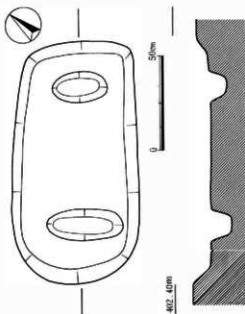


図32 SK 5 (1:20)

#### SK 6

SZ 1の東に検出されたもので、径55cmを測る円形の土器棺墓である。土器棺には大形の壺2個体が使用されており、底部を西に向け横にされた状態で埋置されている。口縁部を欠いた壺 [図34-2] に壺の胴部 [同一1] が被さるように出土 [図33] しているが、上部削平により2は半分程、1はほとんどに破損を受け破片でしかない。内部には土が流入しており3層に分層できる。上層は暗灰色の粘土質土層でかなり強い粘りがある。中層は黄褐色砂質土層で細い帯状となる。下層は黒褐色の粘土質土層で強い粘りがある。

1は胴部破片で内面が荒れ、部分的に剥離する。2は外面胴部まで赤彩されるがその他の部分についてはみられない。なお土器棺内の土を水洗いしたが歯や骨片、玉類などの副葬品と思われる遺物の出土はない。

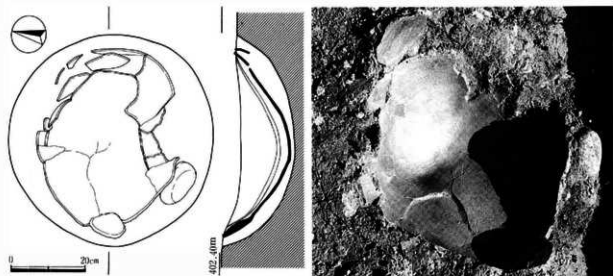


图33 SK 6 (1:10)

SK 6

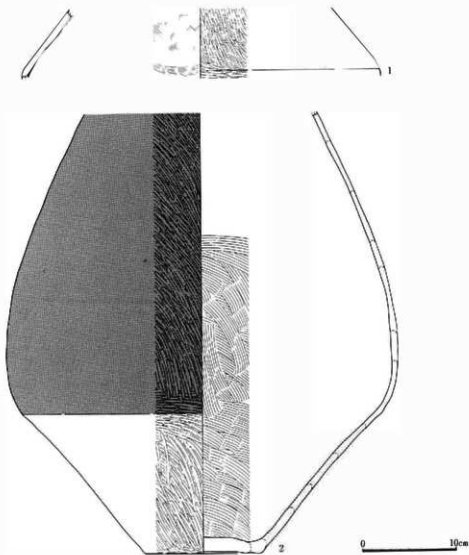
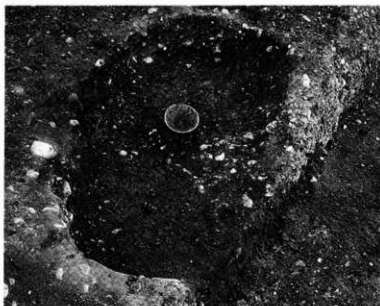


图34 SK 6出土土器 (1:4)



### SK 7

SZ 1の西で検出され、南側一部に破壊を受け全体は確認できなかったものの長辺120cm、短辺75cmの隅丸長方形を呈する木棺墓を想定するが、他で検出する木棺墓とはやや様相が異なる。大きさが他の木棺墓に比べ小さいのに加え、小口穴も確認できないことから本遺構を木棺墓と判断する根拠はない。むしろ土壇墓となる可能性が考えられる。覆土内からは赤彩の鉢が1点 [図36] 出土している。



SK 7

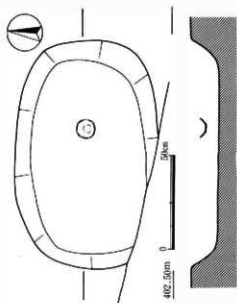


図35 SK 7 (1:20)



図36 SK 7出土土器 (1:4)

### SK 8

SB 1と重複関係にあり、SK 2とSK 5の間に検出されている。SB 1に南側1/3程を破壊されているが、長辺160cmの木棺墓で、底面には小口穴が検出され、その位置より長辺105cm、短辺45cm程の木棺を想定する。他の木棺墓同様小さいものであり、出土遺物はない。



SK 8

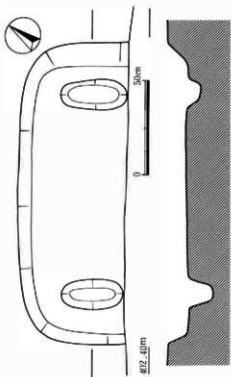


図37 SK 8 (1:20)

### ③ 土坑・溝跡・その他

#### SK 1

本来調査対象地区ではなかったものの、造成による削平のため包含層の露出した地点の調査において検出された遺構である。平面形は円形を呈し、径95cmを測る。(図4 調査区全体図参照)

出土土器〔図38〕には深鉢がある。口縁部と底部を欠き、外面には条線(条紋文)が施文され、その様相から縄文時代晩期に比定されるものである。今回の調査において縄文時代の遺構が検出できたのはこの遺構しかなく判然としないうもの、周辺に該期の居住城が存在する可能性も考えられよう。本

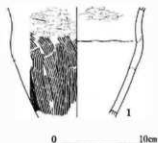


図38 SK 1出土土器(1:4)

遺構の周辺には大小様々な遺構が検出されているが、SK 1以外の遺構に関しては遺物の出土がないため遺構名を付けず、すべて一纏めにして「Pit群1」と便宜的に呼ぶこととする。このPit群1には土坑が19基、溝状遺構が1本あり、SK 1が縄文時代晩期に比定されることから、これらの遺構も同時期のものと考えて良いものと思われる。



Pit群1 (SK 1含む) 検出状況



Pit群2検出・掘り下げ作業

#### SD 1

調査区の中央を南北に縦断する形で検出された遺構で、SB 6と重複関係にある。幅は平均2.30m、深さは最も深いところで1.40mを測り、断面はV字形を呈する。堆積層は3層に分層され、1層(上層)は暗褐色粘土質土層、2層(中層)は黄褐色砂質土層、3層(下層)は黒褐色粘土質土層で、上・下層には多量の礫が混入する。

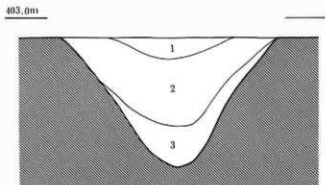


図39 SD 1土層断面図(1:40)

土器は主に下層から出土しており、古墳時代前期土器(図40-1~15)と弥生時代後期土器(16~21)が同一の層から出土しているが、中層からの遺物の出土はない。この溝は土器の出土状況から構築時期を弥生時代後期と考えるが、同時期の遺構と思料される東側に展開する墓跡を囲む、いわゆる区画溝的な役割をはたす溝と把握したい。

出土した古墳時代前期土器には、甕(1-4)、壺?(5)、鉢(6-9)、器台(10・11)、台付甕(15)があり、弥生時代後期土器には、壺(16-18)、甕(19-21)がある。

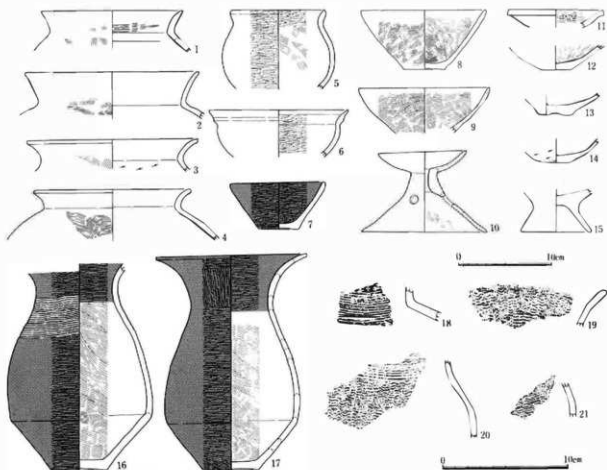


図40 SD1出土土器 (1~17 1:4・18~21 1:3)



SD1掘り下げ作業

## SD 2

SD 1の西側に検出され、中央部分に攪乱を受けるものの調査区を南北に縦断する幅約8 m、深さ80cm前後を測る大きな溝状遺構である。土層堆積状況は図41に示したとおりかなり複雑で、ほとんどは黄褐色系の砂質土層に覆われている。下層には暗褐色あるいは黒褐色の粘土質土層が堆積しており、ここより土器が出土している。

出土土器〔図42〕には壺(1・2・5)、甕(3・4)があり、1～4は古墳時代前期、5は弥生時代後期に比定される土器である。2は有段口縁となり、口縁部には4本単位の筒状工具により外面に波状文、内面には波状文と直線文が交互に施文される。外面の段部分は欠損しており判然としなが舌状に突出する可能性もあろう。

本遺構の西側一帯にはPit群2が検出されているが、Pit内からはもとより検出面からも遺物の出土は皆無であり、各Pitも検出が明瞭でなく人為的に掘り込まれた遺構とは考えにくい。またこの溝状遺構は人為的構築というよりは自然流路として判断する方が妥当のように思われ、この自然流路は遺跡の西端と理解したい。



図41 S D 2 土層断面図 (1:60)



S D 2 土層断面

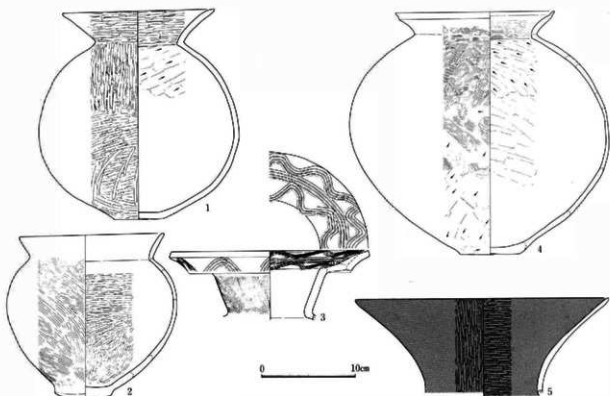


图42 SD 2出土土器 (1:4)

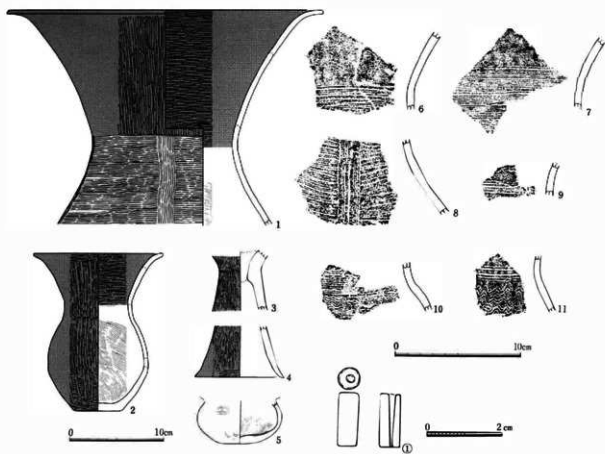


图43 遺構外出土遺物 (1~5 1:4・6~11 1:3・① 1:1)

## IV まとめ

弥生時代後期の墓については円形周溝墓・木棺墓・土器棺墓といった3種類の形態を確認することができた。

浅川扇状地遺跡群内において円形周溝墓の確認は今回が初例であるが、検出された周溝は全体に細く浅いもので、従来の認識からすればやや貧弱なイメージを抱くものも否めない。周溝の規模が大きくないことから掘削の際に出る土量は多くなく、溝により区画された内部の盛り土はそれほど高いものではなかったといえるが、これによって墓壙が深く掘り込まれ、幸いにも主体部の検出状況は比較的良好であったといえる。またSZ1に関していうならば、地形が北西から南東に向かって傾斜しておりこれを意識した構築がなされているものと思われる。したがって北西側の周溝は深めに、南東側の周溝は浅く掘られている状況もこういった地形条件に左右された構築方法をとったものといえる。周溝墓の周辺には木棺墓や土器棺墓が整然と並び、断面がV字となる溝(SD1)が周囲を取り囲むように巡っている当時の墓域を想像することができる。

埋葬には検出された遺構の様子から組み合わせ式箱形木棺(以下、木棺と略す)が用いられたとみられる。木棺の形態分類については福永伸哉氏の研究を参考にすることが多く本稿においても氏の分類に従うこととする。

福永氏によれば墓壙に観察される差異により大きく3形態に分類ことができるとし、墓壙の底面に認められる小口を埋め込む穴、いわゆる小口穴が検出される「I型木棺」と認められない「II型木棺」とに区別されている。今回の調査においてもI型木棺・II型木棺双方が確認されているが、特に円形周溝墓主体部の埋葬に用いられた木棺がSZ1ではII型木棺、SZ2ではI型木棺と異なった形態を用いている点非常に興味深い<sup>19)</sup>

出土遺物に関してはII型木棺を用いたものと思われるSK3からの5連の銅鍔や無茎の鉄鍔、35点の管玉と10点のガラス玉などが目をみはる。県内におけるこれまでの調査例をみてもこれだけ種類の豊富な遺物を出土した墓跡はあまりなく(表2参照)、とくに銅鍔5点は1基の墓から出土した数としては上直路遺跡(佐久市)の15点に次ぐ多さで、長野市内の調査による複数の出土は本例が初めてとなる。銅鍔は鑄造品とみられ、腕からの取りはずしはほとんど不可能な状態であったと考えられるため、被葬者は銅鍔を着装(右腕)したまま埋葬されたもので、中に残っていた手首と判断される骨はこれを裏付けるものといえる。鉄鍔は副葬品として棺内に納められたものと思えるが、出土位置から体内にあった可能性も捨て切れない。また調査時に出土した管玉24点(残りの管玉11点ガラス玉10点はすべて内部の土を洗浄した際に出土している)は連なることなく散乱して出土している。埋葬の際、被葬者に対して何らかの葬送儀礼を行っているものと思われるが、銅鍔の下からも管玉が出土していることを考慮すれば遺体の上に直に撒き散らしたと考える方が妥当であろう。

SZ1の主体部覆土上層からは多くの小型土器が出土している。埋葬には木棺を用いているとみられることからおそらく棺上においてこれらの土器を使った葬送儀礼が行われたものと判断したい。底面からは鉄鍔が潰れた状態で出土し、一部の表面には布状の繊維質が付着している。埋葬時に副葬品として布にくるまれて棺内に納められたものと推測する。鉄鍔は幅が細く断面は肉厚の三角形を呈するもので、数本が密着しており接合の結果全周するものはないが3~4周の螺旋状になるものと想定したい。またSZ2からも鉄鍔が出土しているものの、SZ1出土のものに比べると幅が広く断面は扁平な三角形となる。すべて接合はしないが、破片の中に端部が認められることから螺旋状になると思われる。そのほか不明鉄片や管玉1点・ガラス玉4点が出土している。これら以外の墓に関して木棺墓とみられるSK2・4・5・7・8、土器棺墓のSK6からは副葬品や埋葬時に身に着けていた装飾品などの出土は確認されず、SZ1・2やSK3と比較すればその規模は小さく、またSK7などはむしろ土壙墓である可能性が高い。墓の内部から形状をとどめている骨はSK3の銅鍔内の手首の骨と思わ

表2 長野県内における弥生時代墓跡出土金属製品一覧表<sup>2)</sup>

遺跡名	所在地	墓の形態	時期	金属製品の種類	伴出遺物
須多々茅遺跡	飯山市飯山須多々茅	円形周溝墓	後期	鉄鋼	土器・勾玉
湯倉銅窟	下高井郡高山村		後期	鉄鋼	土器
七瀬遺跡	中野市七瀬	土器棺墓・土塚墓	後期	銅鋼・鉄鋼・鉄ヤリガンナ	土器
本村東沖遺跡 上松東園地地点	長野市上松	木棺墓・円形周溝墓	後期	銅鋼・鉄鋼・鉄鍔・鉄片	土器・管玉・ガラス玉
篠ノ井遺跡群 新谷線地点	長野市篠ノ井塩崎	円形周溝墓	後期	銅鋼・銅鍔・鉄鋼・鉄鍔	土器・ガラス玉
篠ノ井遺跡群 聖川堤防地点	長野市篠ノ井塩崎	円形周溝墓・木棺墓? 土塚墓	後期	鉄鋼・鉄剣・鉄鍔	土器・ガラス玉
光林寺裏山遺跡	長野市篠ノ井小松原	不明	中期?	鉄斧	土器
上田原遺跡	上田市上田原	土塚墓・円形周溝墓	後期	鉄斧・鉄鋼	土器・ガラス玉
上直路遺跡	佐久市岩村田	木棺墓	後期	銅鋼	土器
中城原遺跡	大町市社館ノ内	木棺墓	後期	鉄鋼・不明鉄製品	土器・管玉・ガラス玉
丘中学校遺跡	塩尻市広丘	方形周溝墓	後期	鉄鋼	管玉・ガラス玉
家下遺跡	茅野市ちの横内	木棺墓	後期	銅鋼	
滝沢井尻遺跡	飯田市伊賀良大瀬木	方形周溝墓	後期	鉄剣	

れるもの他、SZ1の主体部やSK2からは奥歯が出土している。その出土位置から頭位は東に向くもので、その他の墓に関しても同時期のものと把握されることから、頭位はすべて東へ向けて埋葬されているであろう。

古墳時代の住居跡は全部で7軒確認され、出土する土器の様相からすべてか前期に比定されるものであるが、調査時においてこれら住居の覆土に差異が認められている。SB1・4・5の覆土には黄褐色の砂質土の堆積が確認され、そのほかの住居の覆土には見られず住居構築に時間差があるものと理解できる。ここでは黄褐色の砂質土層が確認されるSB1・4・5をA類住居、確認されないSB2・3・6・7をB類住居と分類する。

A類住居は大きく3層に分層でき、上層となる黄褐色の砂質土層中からは遺物はまったく出土せず、すべてその下層からの出土である。B類住居にはこの黄褐色砂質土層が確認されず、暗い褐色系の土が堆積するのみである。このように覆土の異なった堆積状況がみられるものの、住居の平面形や内部施設などの住居構造にはそれほど大きな差は認められない。住居の平面形は基本的に方形を呈し、主柱穴は4本の方形配列となる。主柱穴間には枘が築かれ、壁溝・貯蔵穴・間仕切溝が普遍的に存在する。検出された住居すべてが全体を把握できたわけではないのでこれらの条件がすべてあまるというものではないが、該期住居形態の一様相としてとらえることができる。先述したとおり各住居とも出土する土器は前期に比定されるもので、A類住居・B類住居とも出土する土器形態には大きな差はみられない。しかしながら、覆土にみられる差異は明らかにA類住居とB類住居に時間差が生じていることをうかがわせるものであり、とくにSB1と7に認められる重複はこの時間差の存在を明確にしているものである。調査所見からすればSB7を破壊してSB1が構築されており、出土する土器の様相を考慮すればB類住居群廃絶後極めて短時間のうちにA類住居群が構築されたことが理解できよう。

従来浅川扇状地遺跡群内の調査において該期の住居跡が検出された例はほとんどなく、今回の調査成果は重要である。先述したとおり各住居とも平面形や内部構造には共通性が認められ、普遍的に存在する貯蔵穴や壁溝、間仕切溝、SB2・3に検出されたベッド状遺構などは、平成3年度に発掘調査された本村東沖遺跡長野高松地点の古墳時代中期から後期の住居跡にも見られるもので、住居形態の変遷ということに関しても良好な資料になるのではなかろうか。

検出された7軒の内SB1と6を除いた各住居に確認された間仕切溝は、壁際に巡る壁溝に付属するような形

で床面に掘り込まれ住居中央に向かって延びる溝状遺構で、住居主軸方向<sup>19)</sup>手前壁中央付近に1本の間仕切溝が認められることは間仕切溝の検出される住居に共通して言える。この他にも複数の間仕切溝が検出されているものの、その位置は様々で共通性は感じられないが、SB2は南壁から、SB3は西壁からそれぞれ支柱穴(Pit4)にかけて築かれる間仕切溝には一種の規則的構造がうかがえる。

間仕切溝は住居内に仕切壁のような板材を埋め込み際に掘られた溝と判断され、仕切壁は住居内の空間を区画する役割、つまり「部屋割り」をしているものと想定する。この「部屋割り」された各箇所は中央の広間(居間)を中心に、ある部分では寝室またある部分では作業場などといったその用途に応じてのいろいろな使い分けがされていたと推測される。とくに規則的に区画される手前隅には貯蔵穴が構築され、その脇には出入口とも思えるような施設(SB3・5)も確認されていることから、この空間を「出入口と貯蔵施設の部屋」と理解することもできよう。しかしながらどの空間をどういった目的で使用したかについてはそれを立証できる遺構・遺物に乏しく、今のところ明確にすることができないため明言は避けておきたいが、いずれにせよ区画することによって住居内の限られた空間をより有効に利用しようとする生活様式の現れであると考えている。

#### 註

(1) 長野県内に関しては青木一男氏により集成・研究がなされ、本報告書を作成するにあたって氏の文献等を参考にさせていただき、また貴重なご助言を賜った。

(2) 金属器一覧表について、様々な文献または多くの方々からのご教示を参考にして作成を試みたが、すべてを網羅しているとは言い難い。おそらく不備があるように思えるが、機会を見て改めて集成してみたい。

また光林寺裏山遺跡出土の鉄斧について、共存する土器の様相から中期として扱った。

(3) 住居の主軸方向については炉の検出された位置により任意に設定したものである。基本的にがは住居の奥に位置するものとし、その反対側すなわち手前には出入口と思われる施設があるものと考え、この方向を主軸とした。なおSB4の様子が検出されなかった住居や、SB7の様子が炉の位置が他の住居と違うものなどは、これら住居が同時期でありみな同じ方向にむいているものと仮定して扱った。

#### 参考文献

- 青木一男 1993 「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』69・70 長野県考古学会  
1994 「中部山岳北域の弥生木棺墓に関する一考察」『中部高地の考古学IV』 長野県考古学会  
白居直之 1994 「長野県弥生時代の金属器出土遺跡一覧」『信州の鉄を探る』 産業考古学会釜山金属分科会・金属の会  
宇賀神誠司 1998 「長野県内における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要2』 08長野県埋蔵文化財センター  
大村 直 1983 「弥生時代における鉄鍬の変遷とその評価」『考古学研究』30-3 考古学研究会  
土屋 積 1993 「I 中部高地の古墳出現前後の様相」「II 長野県域における集落・墳墓の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会新編大会実行委員会  
08長野県埋蔵文化財センター 1994 「赤い土器のクニ」『長野県立歴史館開館記念企画展』  
橋本澄朗 1995 「間仕切住居に関する覚書」『研究紀要』第12号 栃木県立博物館  
福永伸哉 1985 「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』32-1 考古学研究会  
1991 「木棺墓と人の交流」『原始・古代の日本の墓制』 同成社  
前島 卓 1993 「北陸系土器の動向」『長野県考古学会誌』69・70 長野県考古学会  
千曲川水系古代文化研究所他 1988 「東日本の弥生墓制」『第9回三県シンポジウム』



表3 遺構観察表①

番号	器種	法量(cm)			出土位置	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高		外面	内面	
SB1								
1	壺	4.7	7.6	29.7	貯蔵穴	ハケ	口縁のちヨコナデ	ハケ 口縁のちヨコナデ
2	鉢	21.5		6.1	床	ハケ		口縁ヨコナデ 胴部ヘラケズリ
3	甕	22.0		3.6	覆土	ハケ→ヨコナデ	口縁端部面取り	ヨコナデ ヘラケズリ
4	甕	19.2		2.7	覆土	ヨコナデ	口縁端部面取り	ヨコナデ
5	高杯	20.6		2.6	床		ナデ(器面荒れ)	ヘラミガキ
6	鉢	14.1		4.2	覆土	ハケ→ヘラミガキ		ヘラミガキ
7	壺			8.0	覆土	10本単位の棚掘T文字・赤彩・ヘラミガキ		口縁→胴部ヘラミガキ・胴部ハケ
8	鉢	11.1	4.6	4.5	床	赤彩・ヘラミガキ(底部まで及ぶ)		赤彩・ヘラミガキ
9	鉢	12.8		4.4	床	赤彩・ヘラミガキ(底部まで及ぶ)		赤彩・ヘラミガキ
10	瓶	11.9	2.6	7.0	床	ハケ	口縁のちヨコナデ	ヘラケズリ 口縁のちヨコナデ
11			6.6	2.0	床	ヘラケズリ		ナデ
12			12.4	5.7	床	器面荒れ		ハケ
SB2								
1	壺	19.4		5.1	床	ヘラミガキ口縁端部面取り 有段口縁		ヘラミガキ
2	壺			5.5	床	ハケ 赤彩 ヘラミガキ		ナデ
3	甕	14.3	3.8	18.0	Pit4上層	口縁ヨコナデ 胴部ハケ		口縁ヨコナデ 胴部ヘラケズリ
4	甕	13.8	5.4	27.4	床	ハケ 口縁のちヨコナデ		ハケ→ヘラケズリ 口縁ヨコナデ
5			2.2	2.6	床	ハケ		ハケ
6	惣鉢	12.8		7.3	Pit4下層	ヘラミガキ		ヘラミガキ
7	鉢	14.0		5.9	Pit1床	ヘラミガキ底部ヘラケズリ		ヘラミガキ
8	高杯	19.7	15.4	13.2	Pit4床	赤彩・ヘラミガキ		杯部ハケ→赤彩・ヘラミガキ 胴部ハケナデ
9	高杯	17.4		6.2	床	ヘラミガキ 口縁端部軽いヨコナデ		ヘラミガキ
10	高杯	16.6		4.5	床	ヘラミガキ 口縁端部軽いヨコナデ		ヘラミガキ
11	器台	10.1		5.1	床	ハケ 口縁ヨコナデ		器部ヘラミガキ 台部ナデ
12	器台		11.6	6.0	床	ヘラミガキ		器部ヘラミガキ 台部ハケ→ナデ
SB3								
1	壺	17.0		12.0	覆土・床	ハケ→ヘラミガキ		口縁ハケ→ヘラミガキ 胴部ナデ
2	壺	12.2		3.2	床	ヘラケズリ? ナデ		ヨコナデ ハケ
3	壺	22.8		6.7	覆土・床	ヘラミガキ 口縁端部面取り 有段口縁		ハケ→ヘラミガキ・ヘラケズリ
4	甕	19.6		5.6	床	ハケ 口縁ヨコナデ		ナデ
5	甕	17.2		8.7	床	器面荒れ		器面荒れ
6	甕	12.8		4.2	床	器面荒れ		器面荒れ
7	甕	15.0		4.2	床	ナデ		ナデ ヘラケズリ
8	甕	15.4		6.1	床	ヨコナデ 口縁端部面取り		ヨコナデ
9	甕	15.9		6.6	床	ナデ 口縁端部面取り		ナデ
10	甕	15.6		6.1	床	口縁ヨコナデ 胴部ハケ→ナデ 口縁端部面取り 有段口縁		ヨコナデ・ヘラケズリ・板ナデ
11	鉢	13.4		4.7	床	ヘラミガキ		ハケ・ナデ・ヘラミガキ
12	器台	15.0		3.1	床	ヘラミガキ 口縁端部ヨコナデ		ヘラミガキ
13	器台			3.4	床	ヘラミガキ		器部ヘラミガキ 台部ナデ
14	器台			3.3	床	ヘラミガキ		器部ヘラミガキ 台部ハケ・ナデ
15	器台		11.6	4.1	覆土	ヘラミガキ		器面荒れ

表4 遺物観察表②

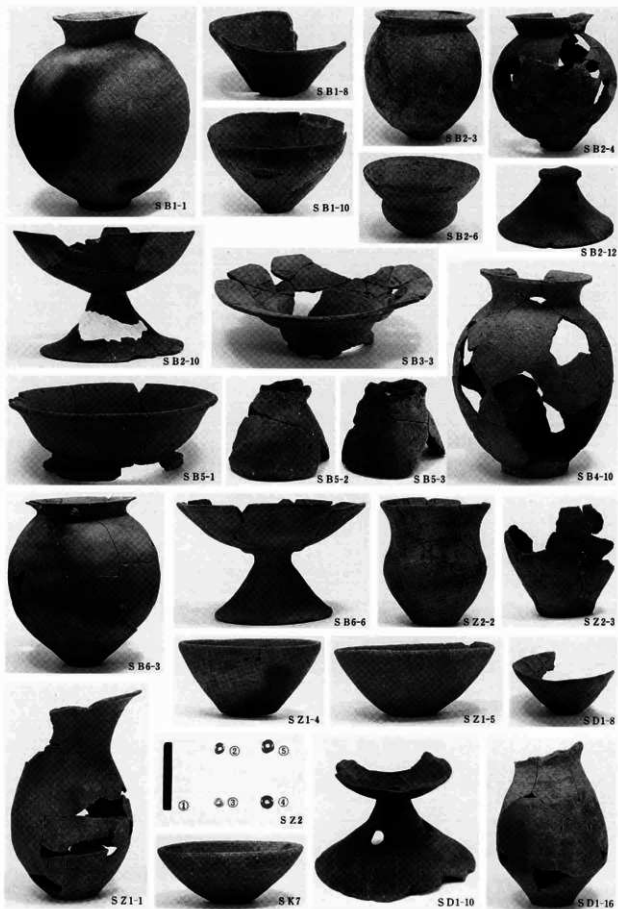
番号	器種	法量(cm)			出土位置	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高		外面	内面	
16	台篋	12.0	6.1		床	ハケ脚部ナデ	ヘラミガキ脚部ナデ	
17	鉢	5.7	4.9		床	赤彩・ヘラミガキ 底部ヘラケズリ	赤彩・ヘラミガキ	
SB 4								
1	壺	24.2		8.2	覆土・床	ハケ・ヘラミガキ 口縁のボタシヤ所 陶器部取り 凝凹線文	ハケ→ヘラミガキ→ヨコナデ	
2	甕	18.2		11.2	覆土・床	ハケ・口縁のちヨコナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ ナデ	
3	甕	20.6		2.5	床	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
4	甕	19.4		3.5	床	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	
5	甕	14.0		3.0	床	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ・ヘラケズリ	
6	甕	16.2		8.2	壁溝・床	ハケ・ヨコナデ 口縁端部面取り	ナデ	
7	甕	18.4		6.0	床	ハケ→ヨコナデ 口縁端部面取り	ハケ→ヨコナデ ナデ	
8	甕	24.0		3.4	覆土	ヨコナデ 口縁端部面取り	ヨコナデ	
9	甕	16.6		7.5	覆土・床	ハケ→ヨコナデ 口縁端部面取り	ハケ→ヨコナデ	
10	甕	14.0	7.6	24.7	覆土・床	ハケ→ナデ 口縁端部面取り 凝凹線文	ヨコナデ ハケ	
11	甕	16.2		1.4	覆土	ナデ 口縁端部面取り	ナデ	
12	甕	23.6		1.1	覆土	ヨコナデ 口縁端部面取り 凝凹線文	ヨコナデ	
13	甕	18.6		10.0	床	ハケ→ヨコナデ 口縁端部面取り 凝凹線文	ハケ→ヨコナデ	
14	甕			8.6	覆土	ハラ→ヘラケズリ	ハケ・板ナデ	
15	甕		6.0	11.1	覆土・床	ハケ	ハケ・ナデ	
16	鉢	18.8		7.0	床	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
17	壺	13.3		6.3	壁溝	赤彩・ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ	
18	壺	11.6	4.0	12.0	床	ハケ 口縁のちナデ	ハケ 口縁ヨコナデ	
19	壺	12.2	2.4	9.2	床	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
20	鉢	16.2		6.1	床	ハケ→ヘラケズリ→ヨコナデ	ヨコナデ	
21	器台	12.8		3.6	床	ハケ→ヘラミガキ→ヨコナデ	ハケ→ヘラミガキ	
22	器台	8.4		2.3	床	ヨコナデ 口縁端部面取り	ヘラミガキ	
23	器台	7.6		3.5	床	ヘラミガキ 口縁端部ヨコナデ	器部ヘラミガキ 台部ナデ	
24	埴埴		2.2	2.5	床	ヘラミガキ	ヨコナデ	
25	埴埴		3.2	3.8	床	ナデ	ヘラミガキ・ナデ	
26	埴埴 <sup>1)</sup>			3.5	床	ナデ	ナデ	
SB 5								
1	壺	17.4		6.0	床	ハケ→ナデ	ナデ	
2	台篋	9.5	6.5		床	ナデ 器面荒れ	ナデ 器面荒れ	
3	台篋	9.4	7.2		床	ナデ 器面荒れ	ナデ 器面荒れ	
4	埴埴	14.4		3.4	床	ハケ→ナデ	ナデ	
5	器台	12.2	5.6		覆土・床	ヘラミガキ	器部ヘラミガキ 台部ハケ	
SB 6								
1	壺	10.8		13.4	覆土・床	ハケ→ヘラミガキ	口縁ハケ→ヘラミガキ脚部ハケ	
2	壺	13.0		12.8	床	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
3	甕	19.0	6.0	26.1	床	ハケ→ヘラケズリ 口縁ハケ→ヨコナデ	ハケ 口縁ヨコナデ	
4	甕			8.8	床	ナデ・ハケ	ハケ→ヘラケズリ	
5	甕			7.3	床	ハケ	ナデ	
6	高杯	18.2	11.6	11.0	覆土・床	ハケ→ヘラミガキ	杯部ハケ→ヘラミガキ脚部ハケ	

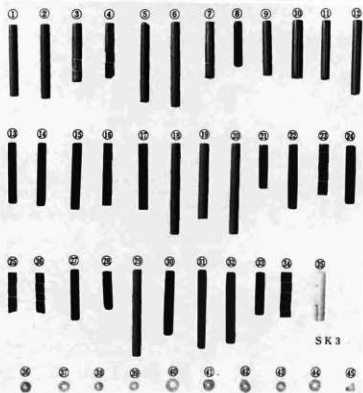
表5 遺物観察表③

番号	器種	法量(cm)			出土位置	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高		外面	内面	
SB7								
1	壺	16.8		4.9	床	赤彩・ヘラミガキ	赤彩・ヘラミガキ	
2	壺		4.8	6.9	覆土	赤彩・ヘラミガキ	ハケ	
3	壺	19.6		6.5	覆土	ハケ	ハケ・ナデ	
4	壺	16.6		4.2	覆土	ヘラケズリ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	
5	壺		5.2	5.7	覆土	ヘラケズリ	ハケ	
6	壺	22.2		3.7	覆土	ヨコナデ 口縁部面取り	ヨコナデ・ヘラケズリ	
7	壺	13.6		4.0	覆土	ハケ・口縁端部面取り 凝凹線文	ヘラミガキ・ナデ	
8	壺		5.6	10.2	床	8本単位の櫛播波状文 ヘラミガキ	ヘラミガキ? 器面荒れ	
9	鉢	13.6	4.2	4.5	覆土	赤彩・ヘラミガキ	赤彩・ヘラミガキ	
SZ1								
1	壺	15.5	5.0	21.9	覆土	赤彩・ヘラミガキ	赤彩・ヘラミガキ・ハケ	主体部
2	壺	12.6	5.0	13.3	覆土	9本単位の櫛播波状文・波状文→ヘラミガキ	ヘラミガキ	主体部
3	壺		5.0	10.1	覆土	6本単位の櫛播波状文・波状文→ヘラミガキ	ヘラミガキ	周溝
4	鉢	12.2	4.8	6.2	覆土	赤彩・ヘラミガキ 2ヶの小孔 1ヶ所	赤彩・ヘラミガキ	主体部
5	鉢	11.4	3.6	5.2	覆土	赤彩・ヘラミガキ	赤彩・ヘラミガキ	主体部
6	鉢	25.0		4.4	覆土	赤彩・ヘラミガキ 口縁端部面取り	赤彩・ヘラミガキ 主体部	主体部
SZ2								
1	壺	18.8		3.0	覆土	赤彩・ヘラミガキ	赤彩・ヘラミガキ	主体部
SK6								
1	壺			7.4	覆土	ハケ→ヘラミガキ	ハケ 器面荒れ	土器棺
2	壺		12.4	47.0	覆土	赤彩・ヘラミガキ	ナデ・ハケ	土器棺
SK7								
1	鉢	12.5	3.4	4.8	覆土	赤彩・ヘラミガキ(底部まで及ぶ)	赤彩・ヘラミガキ	
SK1								
1	深鉢			11.7	覆土	ヘラミガキ 条痕文	ヘラミガキ・ナデ	
SD1								
1	壺	15.0		4.5	上層	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	
2	壺	18.2		5.1	上層	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	
3	壺	18.0		3.5	下層	ハケ→ヨコナデ 口縁端部面取り	ヨコナデ ヘラケズリ	
4	壺	16.4		5.5	下層	ハケ→ヨコナデ 口縁端部面取り	ナデ	
5	壺?	9.8		8.4	上層	ヘラミガキ	ヘラミガキ・ハケ	
6	鉢	14.8		5.0	下層	ヨコナデ	ヘラミガキ→ヨコナデ	
7	鉢	10.1	4.2	5.0	上層	赤彩・ヘラミガキ	赤彩・ヘラミガキ	
8	鉢	13.2	4.4	6.3	下層	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	
9	鉢	14.0		4.8	下層	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	
10	器台	9.4	13.4	8.5	下層	ヘラミガキ? 器面荒れ	器面ヘラミガキ? 器面荒れ脚部ハケ	
11	器台	10.2		1.9	上層	ナデ 口縁端部面取り	ヘラミガキ	
12			3.2	2.7	下層	ヘラケズリ? 器面荒れ	板ナデ	
13			3.7	2.4	下層	ナデ 底部中央くぼむ	ナデ	
14			2.8	2.6	下層	ヘラケズリ	ナデ	
15	台付壺	7.4		4.6	下層	ナデ	ナデ	

表6 産物観察表④

番号	器種	法量(cm)			出土位置	成形・調整・文様				備考										
		口径	底径	器高		外面		内面												
16	壺	6.0	22.0		下層	8本単位の帯幅直線文3段・赤彩・ヘラミガキ				赤彩・ヘラミガキ・ハケ										
17	壺	16.0	5.8	22.8	下層	赤彩・ヘラミガキ				赤彩・ヘラミガキ・ハケ										
SD 2																				
1	壺	16.2	5.0	23.3	上・下層	ハケ→ヘラミガキ				ヘラミガキ・ヘラケズリ・ナデ										
2	壺	21.0		7.3	下層	4本単位の帯幅波状文 口縁端部面取り・ハケ				4本単位の帯幅波状文・直線文・ヨコナデ										
3	甕	16.9	6.4	25.9	上・下層	ハケ→ヘラケズリ 口縁端部面取り				ハケ・ヘラケズリ 板ナデ										
4	甕	15.2	6.0	17.5	上・下層	ハケ・ヨコナデ				ヨコナデ・ヘラミガキ										
5	壺	27.0		10.4	下層	赤彩・ヘラミガキ				赤彩・ヘラミガキ										
遺構外																				
1	壺	33.6		23.0		9本単位の帯幅丁字文・赤彩・ヘラミガキ				赤彩・ヘラミガキ・ハケ										
2	壺	13.7	4.6	16.8		赤彩・ヘラミガキ				赤彩・ヘラミガキ・ハケ										
3	高杯			6.4		赤彩・ヘラミガキ				ナデ										
4	高杯		9.6	5.5		赤彩・ヘラミガキ				ナデ										
5	埴埴			4.6		ハケ→ナデ														
遺構外																				
番号	名称	法量(cm・g)				材質	番号	名称	法量(cm・g)				材質	番号	名称	法量(cm・g)				材質
		長さ	幅	厚さ	重さ				長さ	幅	厚さ	重さ				長さ	幅	厚さ	重さ	
SK 3																				
	1	銅	5.35	0.84	0.17	54.80	銅	銅玉	1.85	0.25	0.24	緑色凝灰岩	⑩	ガラス玉	0.22	0.27	0.02	ミナマキ 色ガラス		
	2	銅	5.61	0.89	0.21		銅	銅玉	1.71	0.26	0.19	鉄石英	⑪	ガラス玉	0.16	0.35	0.01	ミナマキ 色ガラス		
	3	銅	5.50	0.84	0.17		銅	銅玉	1.85	0.26	0.22	鉄石英	⑫	ガラス玉	0.16	0.27	0.01	ミナマキ 色ガラス		
	4	銅	5.69	0.76	0.20		銅	銅玉	2.52	0.25	0.28	緑色凝灰岩	⑬	ガラス玉	0.25	0.32	0.01	ミナマキ 色ガラス		
	5	銅	5.71	0.89	0.17		銅	銅玉	2.09	0.28	0.27	緑色凝灰岩	⑭	ガラス玉	0.14	0.36	0.04	ミナマキ 色ガラス		
	6	銅	1.60	2.11	0.15	0.54	鉄	銅玉	2.52	0.28	0.27	緑色凝灰岩	⑮	ガラス玉	0.24	0.34	0.03	ミナマキ 色ガラス		
	①	菅玉	2.00	0.25	0.21	緑色凝灰岩	⑯	菅玉	1.22	0.28	(0.13)	鉄石英	⑰	ガラス玉	0.30	0.35	0.03	ミナマキ 色ガラス		
	②	菅玉	2.02	0.26	0.24	緑色凝灰岩	⑰	菅玉	1.80	0.29	0.20	鉄石英	⑱	ガラス玉	0.30	0.30	0.02	ミナマキ 色ガラス		
	③	菅玉	1.61	0.30	0.18	鉄石英	⑱	菅玉	1.46	0.29	0.16	鉄石英	⑲	ガラス玉	0.20	0.32	0.02	ミナマキ 色ガラス		
	④	菅玉	1.61	0.30	0.18	鉄石英	⑲	菅玉	1.63	0.29	0.19	鉄石英	⑳	ガラス玉	—	—	—	ミナマキ 色ガラス		
	⑤	菅玉	(1.45)	0.24	(0.16)	緑色凝灰岩	⑳	菅玉	(1.20)	0.24	(0.11)	緑色凝灰岩	SZ 1							
	⑥	菅玉	2.18	0.24	0.25	緑色凝灰岩	㉑	菅玉	(1.15)	0.26	(0.12)	緑色凝灰岩	1-3	銅	(6.60)	(0.43)	(0.18)	—	鉄	
	⑦	菅玉	2.39	0.25	0.27	緑色凝灰岩	㉒	菅玉	1.44	0.27	0.16	緑色凝灰岩	SZ 2							
	⑧	菅玉	1.55	0.25	0.15	鉄石英	㉓	菅玉	(1.11)	0.25	(0.11)	緑色凝灰岩	1-7	銅	(7.80)	(0.51)	(0.11)	—	鉄	
	⑨	菅玉	(1.22)	0.22	(0.13)	緑色凝灰岩	㉔	菅玉	2.50	0.28	0.25	緑色凝灰岩	①	菅玉	2.04	0.25	0.21	緑色凝灰岩		
	⑩	菅玉	1.48	0.23	0.15	鉄石英	㉕	菅玉	1.85	0.29	0.23	緑色凝灰岩	②	ガラス玉	0.19	0.35	0.01	ミナマキ 色ガラス		
	⑪	菅玉	1.58	0.32	0.25	鉄石英	㉖	菅玉	2.30	0.25	0.23	緑色凝灰岩	③	ガラス玉	0.29	0.29	0.03	ミナマキ 色ガラス		
	⑫	菅玉	1.60	0.22	0.16	鉄石英	㉗	菅玉	2.81	0.25	0.26	緑色凝灰岩	④	ガラス玉	0.21	0.42	0.04	ミナマキ 色ガラス		
	⑬	菅玉	2.01	0.24	0.21	鉄石英	㉘	菅玉	1.29	0.26	0.13	緑色凝灰岩	⑤	ガラス玉	0.45	0.44	0.08	ミナマキ 色ガラス		
	⑭	菅玉	1.71	0.27	0.17	鉄石英	㉙	菅玉	1.29	0.29	0.18	鉄石英	遺構外							
	⑮	菅玉	1.79	0.28	0.17	鉄石英	㉚	菅玉	1.41	0.35	0.25	鹿角?	①	菅玉	1.42	0.59	0.80	鉄石英		





# 報告書抄録

ふりがな	あきかわせんにょうち いせきでん ほんむらひがしおき いせきに							
書名	浅川扇 状地遺跡群 本村 東 沖遺跡II							
副書名	市営住宅上松東団地2号棟建設事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第67集							
編著者名	寺島孝典							
編集機関	長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）							
所在地	〒381-22 長野市小島田町1414 長野市立博物館内 Tel 0262-84-0004							
発行年月日	1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほんむらひがしおき 本村 東 沖 遺跡II	ながの しとおあびらうえまつ 長野市大字上松 あきかわせんにょうち 字本村 東 沖	20201	A-053	36度 40分 04秒	138度 12分 20秒	1994年 10月24日 ～ 12月16日	1,600㎡	市営住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
本村東沖遺跡II	居住域	縄文時代晩期	上坑1基他 円形周溝墓3基 木棺墓6基 土器棺墓1基 溝2条 土坑多数 住居跡7軒	土器		銅釧内に手首 の骨残存  北陸系土器		
	墓域	弥生時代後期		土器・銅釧・鉄釧・ 鉄銚・管玉・ ガラス玉・人骨				
	集落域	古墳時代前期		土器				

## 長野市の埋蔵文化財

- |       |   |       |  |
|-------|---|-------|--|
| 1968年 | 第1集『信濃長原古墳群』                            | 1990年 | 第36集『屋敷遺跡Ⅰ』                                  |
| 1976年 | 第2集『浅川西集』                               |       | 第37集『篠ノ井遺跡群Ⅱ』                                |
| 1978年 | 第3集『中村遺跡』                               | 1991年 | 第38集『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡③』                       |
|       | 第4集『塩崎遺跡群』                              |       | 第39集『塩崎遺跡群⑥・石川集里遺跡⑤』                         |
| 1979年 | 第5集『塩崎遺跡群②』                             |       | 第40集『松原遺跡』                                   |
| 1980年 | 第6集『三輪遺跡-付水内坐一元神社遺跡』                    |       | 第41集『小島柳原遺跡群 中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群<br>押鎌遺跡・埴田遺跡』     |
|       | 第7集『田中沖遺跡』                              | 1992年 | 第42集『田中沖遺跡②』                                 |
|       | 第8集『篠ノ井遺跡群』                             |       | 第43集『南宮遺跡』                                   |
|       | 第9集『岡ヶ尾遺跡(第1～3次)・池間遺跡・塩崎遺跡群③』           |       | 第44集『塩崎遺跡群⑦』                                 |
| 1981年 | 第10集『海谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』               |       | 第45集『石川集里遺跡⑥』                                |
|       | 第11集『新清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』                  |       | 第46集『篠ノ井遺跡群④』                                |
| 1982年 | 第12集『浅川扇状地遺跡群-幸礼/バイパスA・E地点遺跡-』          |       | 第47集『浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡・本郷遺跡・<br>柳山遺跡・稲穂遺跡』(2分冊) |
| 1983年 | 第13集『浅川扇状地遺跡群 蓮田遺跡・川田集里的遺構・石川<br>集里的遺構』 |       | 第48集『小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅰ』                          |
| 1984年 | 第14集『石川集里的遺構②・上駒沢遺跡』                    | 1993年 | 第49集『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡④』                         |
|       | 第15集『新清水遺跡②』                            |       | 第50集『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』                        |
| 1985年 | 第16集『石川集里的遺構③・(付上駒沢遺跡)』                 |       | 第51集『松原遺跡Ⅱ』                                  |
| 1986年 | 第17集『浅川扇状地遺跡群-幸礼/バイパスB・C・D地点遺跡-』        |       | 第52集『田牧稲穂遺跡』                                 |
|       | 第18集『塩崎遺跡群Ⅳ 市道松沼-小田井神社地点遺跡-』            |       | 第53集『岩崎遺跡』                                   |
| 1987年 | 第19集『土口將軍塚古墳-重要遺跡確認緊急調査-』               |       | 第54集『古町遺跡 成人塚』                               |
|       | 第20集『三輪遺跡②』                             |       | 第55集『浅川扇状地遺跡群 駒沢新町遺跡Ⅰ』                       |
|       | 第21集『丹01小学校遺跡』                          |       | 第56集『上見林遺跡』                                  |
|       | 第22集『長野吉田高校グラウンド遺跡』                     |       | 第57集『石川集里遺跡⑦』                                |
| 1988年 | 第23集『塩田遺跡群 富士宮遺跡』                       |       | 第58集『松原遺跡Ⅲ』                                  |
|       | 第24集『塩崎遺跡群Ⅴ 巖屋敷遺跡』                      |       | 第59集『史跡 松代藩主直田家墓所』                           |
|       | 第25集『小島柳原遺跡群 南川向遺跡』                     | 1994年 | 第60集『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』                             |
|       | 第26集『東斎場遺跡』                             |       | 第61集『栗田城跡②』                                  |
|       | 第27集『小堂見縄跡』                             |       | 第62集『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡⑤ 小島柳原遺跡群<br>上小島遺跡』        |
|       | 第28集『宮崎遺跡』                              |       | 第63集『松原遺跡Ⅳ』                                  |
|       | 第29集『浅川扇状地遺跡群 浅川端遺跡』                    |       | 第64集『小島柳原遺跡群 宮西遺跡』                           |
|       | 第30集『地附山古墳群』                            |       | 第65集『浅川扇状地遺跡群 幸礼/バイパスB地点遺跡②』                 |
|       | 第31集『町川田遺跡』                             |       | 第66集『石川集里遺跡④』                                |
| 1989年 | 第32集『中集遺跡』                              |       |  |
|       | 第33集『嶋前遺跡』                              |       |  |
|       | 第34集『石川集里遺跡④』                           |       |  |
|       | 第35集『篠ノ井遺跡群Ⅰ』                           |       |  |

### 長野市の埋蔵文化財第67集

#### 浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡Ⅱ

平成7年3月24日 印刷  
平成7年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会  
発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 信毎書籍印刷株式会社